

令和3年度

所 報

—事業の成果と記録—



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立諫早青少年自然の家



国立諫早青少年自然の家は持続可能な開発目標 (SDGs) を支援しています

はじめに

○コロナの時代

2021年1月、新型コロナウイルス感染症が日本における最初の感染者の発生から第1波が到来、1月9日から3月21日までまん延防止等重点措置は発令され、経済活動をはじめ、私たちの当たり前の生活が一変してから、2022年3月では第6波となっています。2021年は、コロナ禍においても東京五輪が開催されるなど、感染防止対策やワクチン接種によってウィズコロナの生活が日常となりつつあります。

また、地球規模で見ても、各地で大規模な自然災害が多発しており、コロナ禍に象徴されるように、近年は、「VUCA（不安定、不確実、複雑、曖昧）」が急速に進展する世界に直面する中で、新たな価値を創造する力や繋がり協働する力が求められています。

○子供たち

コロナ禍の1年、子供や若者たちはマスク着用、三密を避けるための様々な対策の中、部活動や学校行事の制限、校外活動の禁止、オンライン授業など、人と群れる、触れる、交わるといった直接的な体験が激減してしまいました。しかし、学校や子供たちの学びに関わる現場では、コロナ禍において感染防止対策をしながらできること、やりたいことを考え、工夫して実行したこともたくさんありました。これまでの常識、当たり前だと思っていたことを覆す発想やアイディア、それを具現化する知恵は、“このままでは学びが止まってしまう！”という大人や子供たちにも生まれた強い危機感と情熱がそうさせてきたのだと思います。

○諫早自然の家

自然の家でも、宿泊定員や利用人数の制限や三密を避けるなどの感染防止対策を徹底し、利用対応や教育事業を実施してきました。コロナ禍においても体験活動の機会や場、教育サービスを提供するためには、職員の安全・安心が第一と考え、三密を避けるなどの基本的感染症防止対策をはじめ、ワクチンの職域接種の推進、不織布マスク着用徹底など職場環境にも気を配りました。

日々、感染状況が変動する中で、これまでの当たり前を見直し、新たな仕組みやルールを作る作業に追われた1年でした。それは、青少年教育施設の使命、体験活動を提供することの意義を改めて考え、今やるべきこと、これからやらねばならぬことを再認識する機会となりました。

○青少年教育施設の不易と流行は何か

国立青少年教育施設は、昭和34年に中央青年の家が設立されて100年にも満たない歴史ではありますが、過去の失敗や成功などの出来事や歴史から学ぶこと、コロナ禍は、今こそ私たちに大きなチャレンジとチェンジの機会を与えてくれている、、、そういう気がしてなりません。

諫早自然の家は、“良質な体験活動の機会と場を提供する”という原点に今一度立ち返り、今必要とされていることや未来の社会を想像し、失敗を恐れずチャレンジする勇気と行動力、失敗を糧にする前向きな姿勢をもって、皆様に愛され、共感される施設を目指してまいりたいと思います。

令和4年3月 所長 蓮見直子

<目 次>

I 教育事業の報告

1. 令和3年度事業実績一覧	1
2. 青少年教育に関するモデル的事業	
(1) 実践研究事業 課題を抱える青少年を支援する体験活動「チョイス」	3
(2) 地域の実情を踏まえた特色あるプログラム事業（特色化事業） 「限界突破！プチサバイブキャンプ2nd」	8
(3) 全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」 「地域探究トライアル」オリエンテーション合宿 in 諫早	13
3. 社会の要請に応える体験活動等事業	
(1) 親子・幼児等を対象に自然体験や読書活動などに親しむ機会と場を提供する事業	
1) 「タラッキーキャンプ」	20
2) 「家族で体験フェスティバル」	24
3) 「家族で山をさるこう会」	28
4) 「諫早青少年自然の家 キャンプ Week」	33
5) 「われら沢登り探検隊」	37
6) 「まち day キャンプ！」	41
7) 「みんなで書き初めばしてみんね！」	45
8) 「チームビルディングセミナー」	49
9) 「子どもゆめ基金助成金募集説明会」	52
(2) 青少年を対象に体験活動を通じた自己成長や自己実現等を図る事業 「サバイバルキャンプ」	55
(3) 環境教育や人権教育などのESDに対応した事業 「木育キャンプ」	59
4. 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業	
(1) 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業	
1) 生活・自立支援キャンプⅠ（児童養護施設の子ども支援事業） 「わくわくチャレンジキャンプ（佐賀）」	64
2) 生活・自立支援キャンプⅡ（ひとり親家庭の子ども支援事業） 「わくわくチャレンジキャンプ（長崎）」	68
3) 不登校・引きこもり等の課題を抱える青少年の支援事業 「諫早自然の家にきてみんな！」	73
5. グローバル人材の育成を見据えた国際交流事業	
(1) 国内での国際交流事業 「イングリッシュキャンプ」	78
6. 青少年教育指導者等の養成・研修事業	
(1) 青少年指導者等の養成・研修事業	
1) 「自然体験活動指導者（NEALリーダー）養成研修」	81
2) 「教員免許状更新講習」	86
3) 「グループをチームに育てるプログラム研修会（体験編）」	91

(2) ボランティアの養成事業 「自然体験活動ボランティア養成研修」	96
(3) ボランティアによる自主企画事業 「チャレンジキャンプ」	102
7. 特別研修支援 「諫早市少年センター自然体験活動」	107
8. 出前事業 「出張！諫早自然の家！！」	111
9. 研修支援 「キャンプの日」	115

II 研修支援事業・管理運営の記録

1. 令和3年度利用実績	
(1) 利用者数・利用団体数・稼働率	119
(2) 平成26年度から令和3年度までの利用者数・利用団体・稼働率	120
(3) 団体種別利用状況	121
(4) 県別利用状況	122
(5) 県ごとの団体種別利用実績	
(6) 長崎県内市町ごとの利用状況	123
(7) 長崎県内市町ごとの団体種別利用実績	
(8) 宿泊日数別利用状況	124
(9) 利用者アンケート	
(10) 活動プログラム別利用状況	
(11) 開所からの利用状況	125
(12) 傷病発生状況	126
(13) 令和3年度の利用状況等に関する分析	128
2. 利用者の安全及びサービス面の向上のために (主な工事・施設保全・物品購入の状況・エアウィーヴ受入)	130
3. 新型コロナウイルス感染症拡大防止対策	133
4. 令和3年度施設業務運営委員会	140
5. 組織図・職員名簿（令和4年3月現在）	141

III 参考

令和3年度の運営方針	143
令和3年度教育事業等方針	144
令和3年度年度計画における数値目標	148
令和4年度事業計画一覧	149

I 教育事業の報告

No	事業名	事業趣旨	対象	計画日	実施日	参加人数 参加家族数	備考
3 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業							
ア 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業							
17	生活・自立支援キャンプⅠ (児童養護施設の子ども支援事業)	児童養護施設の子供たちが、自然体験や生活体験を通して、自尊感情を高めるとともに、体力の向上及び基本的な生活習慣の定着を図る。	児童養護施設の児童生徒	8/10(火)~8/12(木)	8/10(火)~12(木)	43	対象：清昭園
18	生活・自立支援キャンプⅡ (ひとり親家庭の子ども支援事業)	ひとり親家庭の子供たちが共同宿泊生活体験を通して、「早寝早起き朝ごはん」・「家庭学習の習慣」といった基本的な生活習慣や、家庭で生かせる献立作りや調理法・栄養バランス等の「食育」に関する知識・技能を身につけ、できる体験を積み重ねることで、自尊感情を高める一助とする。	ひとり親家庭の児童	1/8(土)~1/10(月・祝)	1/8(土)~10(月・祝)	15	協力：県内の母子専科会
19	不登校・引きこもり等の課題を抱える青少年の支援事業 「自然の家にきてみんなね」	自然の家での様々な体験活動を通して、不登校、引きこもりなどの課題を抱える青少年に自然体験活動の楽しさや達成感を感じさせ、自己肯定感や自己有用感を高める。また、他者との交流や自然の家の規則正しい生活を通して、基本的な生活習慣づくりのきっかけとする。	不登校・引きこもり等の児童・生徒	通年 (通常期：毎週月曜日) (閑散期：常時相談)	11/8(月), 19(金), 26(金) 12/4(土), 13(月), 24(金) 1/15(土), 22(土) 2/27(日), 3/21(月)	1名10回	
	チョイス	(1と同一の事業)					
4 グローバル人材の育成を見据えた国際交流事業							
ア 独自の青年及び青少年指導者等の交流事業							
※本部主催の国際交流事業が主							
イ アジア及びミクロネシア地域の青少年交流事業							
※本部主催の国際交流事業が主							
ウ 国内での国際交流事業(イングリッシュキャンプ等)							
20	イングリッシュキャンプ	自然体験活動の中で、英語を聞いたり話したりすることを通して、英語によるコミュニケーションの楽しさを実感せるとともに、言語や文化について理解を深める。	諫早市内の小学3~4年生	10/2(土)	10/2(土)	29	諫早市教育委員会委託事業
5 青少年教育指導者等の養成及び資質の向上に関する事業							
ア 青少年指導者等の養成・研修事業							
a 自然体験活動指導者(NEAL)養成事業							
21	NEALリーダー養成事業	自然体験活動指導者認定制度のもと、自然体験活動指導者(NEALリーダー)の資格取得に必要な講習会(概論1)を開催し、専門的な知識と技術をもって自然体験活動の普及や振興に貢献する指導者を養成する。	青少年教育・学校教育関係者、大学生	9/18(土)~9/20(月)	12/26(日)~28(火)	14	
b 教員免許状更新講習							
22	教員免許状更新講習	新学習指導要領で示された「体験活動の充実」を踏まえ、体験活動に関する理解をより一層深めることで、教育内容の充実を目指す。	教員(受講対象者)	① 8/28(土) ② 9/11(土) ③ 10/2(土)	① 8/28(土) ② 9/11(土) ③ 10/2(土)	① 31 ② 32 ③ 37	開設者：長崎大学
c その他							
23	グループをチームに育てるプログラム研修会(体験編)	グループの力を生かす体験活動プログラムの体験を通して、基本となる手法や理論の習得を図る。	教員、スポーツ指導者、施設職員、大学生、高校生等	① 佐賀編 5/29(土) (波戸岬少年自然の家) ② 長崎編[1] 6/26(土) ③ 長崎編[2] 8/25(水)	① 佐賀編 5/29(土) (波戸岬少年自然の家) ② 長崎編[1] 6/26(土) ③ 長崎編[2] 8/25(水)	① 14 ② 14 ③ 7	共催：佐賀県北山少年自然の家
イ ボランティアの養成・研修事業							
a ボランティアの養成事業							
24	自然体験活動ボランティア養成研修	青少年の体験活動事業で活動するボランティアスタッフに求められる基礎的な知識・技術を習得するとともに、ボランティア活動への参加意欲を高める。	高校生、高専専門学校生、大学生、社会人	6/19(土)~6/20(日)	6/19(土)~20(日) (補講)7/18(土)	17 (補)25	NEALリーダー・カリキュラムの読み替えあり
b ボランティアの研修事業							
c ボランティアによる自主企画事業							
25	大学生のためのボランティア活動推進事業 「自主企画事業支援プロジェクト」チャレンジキャンプ	新しい仲間と出会い、協力する自然体験活動を通して、相手の気持ちを考えて行動する力を育む。	小学3・4年生	12/18(土)~12/19(日)	12/18(土)~19(日)	24	
※ 研修支援関係							
26	キャンプの日	毎月第3日を「キャンプの日」に制定し、キャンプ等の自然体験活動を推進する機運を高め、家族等の利用促進を図る。	幼児や小・中・高・大学生のいる家族	デイキャンプ 毎月第3日曜日 テント泊体験 デイキャンプ前日からの 宿泊(5, 6, 10~2月)	(デイ) 4/17, 4/18, 5/16 6/20, 7/17, 10/17, 11/21 12/19, 1/16, 3/20 (テ泊) 10/16~17, 11/20~21 12/18~19, 1/15~16	デイ 計102家族 テ泊 計18家族	
27	諫早市少年センター (適応指導教室)	体験活動を通して、協調性・自主性・耐性・感謝の気持ちを育てる。	適応指導教室に通う児童及び生徒	① 6/2(水)~3(木) ② 9/10(金) ③ 10/14(木)~15(金) ④ 11/16(火) ⑤ 12/8(水) ⑥ 2/4(金)	① 6/2(水)~3(木) ② 9/16(木) ③ 10/14(木)~15(金) ④ 11/16(火) ⑤ 12/8(水) ⑥ 2/4(金)	児童生徒 84 指導者等 26	
	大牟田市昭和教室 (適応指導教室)	体験活動を通して、協調性・自主性・耐性・感謝の気持ちを育てる。	適応指導教室に通う児童及び生徒	9/27(月)~9/29(水)	中止	-	
28	新型コロナウイルス感染防止対策を踏まえた施設利用者説明会	利用予定団体の引率責任者に対して、当施設の新型コロナウイルス感染防止対策を説明するとともに、利用団体が留意していただく内容を周知する。	利用予定の学校・団体等の引率責任者、行政・学校関係者等	① 5/26(水) ② 6/4(金) ③ 7/29(木) ④ 8/5(木)	① 5/26(水) ② 6/4(金) ③ 7/29(木) ④ 8/5(木)	① 5団体 ② 13団体 ③ 16団体 ④ 20団体	
	小学校宿泊体験学習担当事前研修会	諫早市少年自然の家を利用して宿泊体験学習を実施する小学校が、目的やねらいを明確にした、より教育効果の高い活動プログラムを計画できるようにするために、各校の担当者を対象とした事前研修及びプログラム調整会を行う。	本施設利用の大牟田市及びみやま市立小学校の担当者	6/11(金)	中止	-	
29	出張！諫早自然の家!!	新型コロナウイルス感染症の全国的流行により、体験活動の機会が喪失した青少年に対して、体験活動の機会を提供するため、職員が赴き自然の家の活動プログラムを実施する。	原則として自然の家の利用をキャンセルまたは断念した各学校・団体等	原則として 9/1(水)~3/31(木)の団体 希望日(実施日及び日程は、調整)	10/21(木)(2団体), 25(月)(2団体), 27(水) 11/22(月), 25(木), 28(日) 12/10(金), 13(月) 2/24(木)	11団体 405名	

2. 青少年教育に関するモデル的事業

(1) 実践研究事業

(課題を抱える青少年を支援する体験活動事業)

不登校・引きこもり等の課題を抱える青少年の支援事業 「チョイス」

～一緒に感じよう、見つけよう、自然・自分・仲間～

令和4年3月10日(木) 日帰り

【担当：東島 憲之】



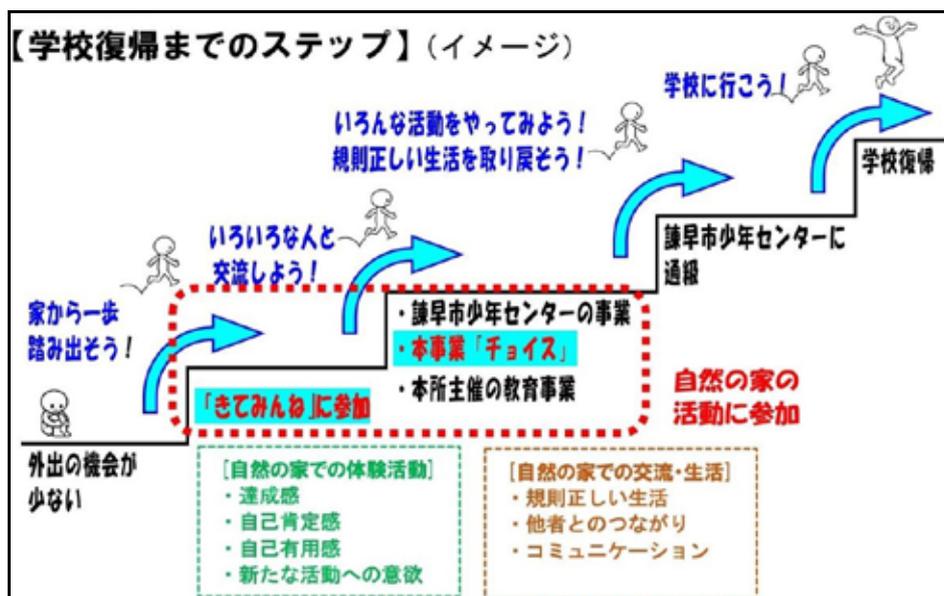
1) 事業の背景

不登校、引きこもりについては、令和2年度に実施された「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省）の結果が公表され、近年増加を続けていたじめの認知件数が減少する一方、小中学校における不登校児童生徒数及び自殺をした児童生徒数が調査開始以来最多となるなど、新型コロナウイルス感染症による学校内外の生活や環境の変化が、子供たちの行動等に大きな影響を与える一因となっていることが伺える結果となりました。長崎県内では、令和2年度1,909名（前年度比119人増）の児童生徒が不登校の状態にあります。

また、当機構では、今年度から始まった第4期中期目標において、関係機関・団体や公立青少年教育施設等、大学の研究者等と連携した上で、実践研究事業を実施し、その研究結果を報告書を通して広く青少年教育関係者へ発信することが目標に定められました。

そこで本所では、諫早市少年センター及び長崎大学と連携し、同センターに通級している児童生徒を含む不登校・引きこもり等の課題を抱える子供たちを対象に、本所の提供する様々なプログラムを選択（チョイス）し、体験する活動を通して個々の興味関心を引き出し、次の一步を踏み出す意欲を高める支援に重点を置いた事業を企画しました。

本事業は、今年度は3月に試行的に実施しましたが、次年度以降、中期的に取り組んでいく予定です。



2) 事業の趣旨

子供たちが抱える喫緊の課題である「不登校・ひきこもり」について、自然体験活動を実施する中で、子供たちの課題解決に資するとともに、体験活動を行うことが自己肯定感や自己有用感を高めるために有効だとする「暗黙知」（長年の経験やノウハウ、イメージといった経験的知識として語られる知識）について、実践を通して、具体的に研究する。

3) 目標

- ① 自然の家で様々な体験活動を楽しむことで、家の外での活動に対する意欲を持つことができる。
- ② できる体験を繰り返すことで、達成感を味わい、自己肯定感、自己有用感を持つことができる。
- ③ 本所職員やボランティア等との関わりを通して、他者と交流することの楽しさを感じることができる。

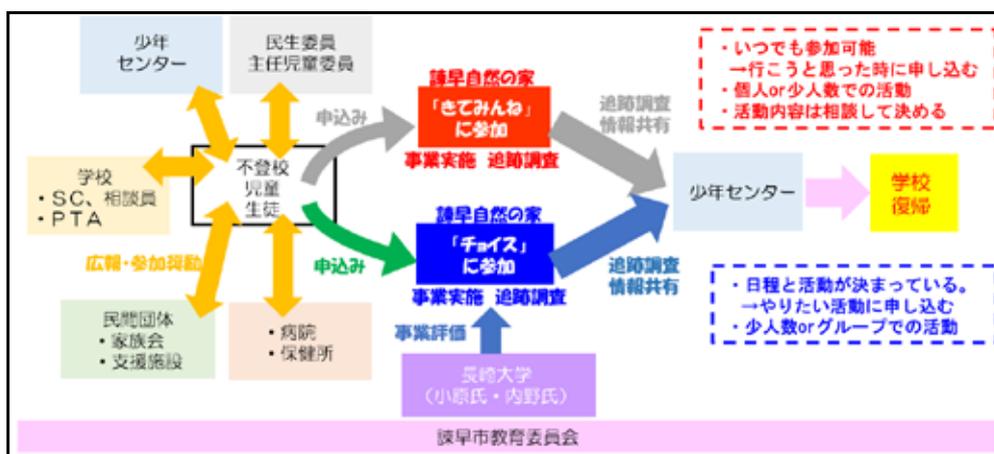
4) 対象

諫早市内の不登校、引きこもり等の課題を抱える児童生徒 20名程度(保護者も参加可)

5) 連携・協力団体

- ① 諫早市教育委員会
- ② 諫早市小学校校長会、中学校校長会
- ③ 諫早市少年センター
- ④ 諫早市PTA 連合会
- ⑤ 諫早市民生委員児童委員協議会連合会
- ⑥ 長崎県立こども医療福祉センター
- ⑦ 県央保健所
- ⑧ 長崎大学

【連携・協力団体のイメージ】



6) 事業の実施

① 期日

令和4年3月10日(木)、11日(金) 日帰り ※途中参加、途中帰宅も可

② 参加者

10日(木)	児童・生徒 14名、保護者 2名、連携団体引率者 4名 計20名								
	小5	小6	中1	中2	中3	保護者	引率者	計	
男	1	2	0	2	1	0	3	9	
女	1	0	1	5	1	2	1	11	
計	2	2	1	7	2	2	4	20	
11日(金)	参加者 なし								

③ 日程

バス迎え ※希望者 (9:30 少年センター発)		
10:00 受付		
10:15 出合いの会(日程説明等)		
10:30 活動開始(選択活動)		
焚き火でのんびり	昼食 (持参)	焚き火でのんびり
火おこし体験		火おこし体験
ミニオリエンテーリング		ミニオリエンテーリング
葉っぱのスタンプ		葉っぱのスタンプ
室内スポーツ		室内スポーツ
14:00 ふりかえり		
バス送り ※希望者 (14:15 自然の家発、14:45 少年センター着)		

④ 活動の様子(※本人及び保護者の意向により、写真の掲載なし)

【出合いの会】

参加者の活動意欲が高まるよう、屋外で円になり、今日1日が「自然の遊園地」と宣言することから会を始めました。1日のねらいを参加者とスタッフ全員で共有し、日程説明後に午前の活動を選択(チョイス)しました。その後、全員で焚き火に点火して活動をスタートしました。

【焚き火でのんびり】

出合いの会で着火した焚き火を見守りながら、のんびりと過ごす活動です。他の参加者が戻った時に焚き火が消えないよう、薪拾いや薪割りに積極的に取り組んでいました。

【火おこし体験】

本所で来年度から利用者に提供予定の「まい切式火おこし器」を使った火おこし体験を行いました。火おこし体験は種火を作るまでに時間がかかる技術と根気が必要な活動でしたが、午前中につけることができなかつたことを悔しがり、午後も同じ活動を選んだ参加者もいました。親子で交代しながら協力して摩擦棒を回し、最後の最後に着火できたことを喜ぶ姿が印象的でした。

【ミニオリエンテーリング】

施設周辺に設置した18か所のポストを探す活動です。ポストを見つけるごとに、全員で地図を見合い、相談して次のポストを見つけていました。活動を続けていくうちに親睦がさらに深まり、道を間違えてもフォローしあえるようになりました。午前も、午後も時間一杯まで活動し、すべてのポストを見つけることができました。

【葉っぱのスタンプ】

施設周辺にある葉っぱを集め、絵の具を塗り、コットンバッグにスタンプする活動です。本所で実施した事業の中で好評を博し、来年度から利用者へ提供する活動を先取りで実施しました。葉っぱに色とりどりの絵の具を塗り、個性豊かな作品を作り上げていました。

【室内スポーツ】

日頃運動する機会の少ない子供たちは、少年センター主催の事業で本所を利用する際も、プレイホールで行うスポーツを楽しみにしています。今回も午前中はバスケットボール、午後はバドミントンと、何をするかを自分たちで話し合っ、楽しく活動することができました。

7) 評価

① アンケート結果（事業全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

②参加者、保護者の声

ア. 参加者

- ・いつもは班の中で成功を目指す活動が多くありましたが、今日は自分で活動を決めて楽しく過ごすことができ、楽しかった。
- ・自分は普段、優柔不断なところがありますが、他の人から意見を求められたり、相手の意見を聞いたり、自分で考えることが多くて楽しかった。
- ・人の役に立てていることが嬉しく、失敗しても笑いながら楽しく過ごせました。

イ. 保護者

- ・いつもならできない事に腹を立てたり、あきらめたりしてしまう場面でも怒り出さずに最後まで活動しようとしていて、成長を感じることができました。
- ・仲間と楽しそうにスポーツする様子を見守ることができ、葉っぱのスタンプも親子で取り組めて良かったです。また、参加させたいと思います。

8) 成果と課題

① 成果

5つの活動の中で「室内スポーツ」を選択する参加者が多い中、中学3年生の男子生徒は活動開始直前に「いつでもできる活動だから」とミニオリエンテーリングに活動を変更しました。周囲に流されず、自分の意志で活動を選択する貴重な経験となりました。

諫早市少年センターの職員の方から、「今回のように活動を個人の意志で決定する機会は各学校の宿泊学習では人数が多く難しいため貴重だ」との感想があり、参加者のアンケートでは、「いつもは班の中で成功を目指す活動が多かったが、自分で活動を決めて楽しく過ごすことができた」との回答があった。これは、本事業の大きな成果の一つと考えられました。

② 課題

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により各学年のまとめの時期である3月の実施予定となり、参加を呼びかけにくい状況でした。今後は学校の行事予定等に配慮した実施時期とすることが必要です。

また、連携団体から適応指導教室の通級生のうち本事業の参加対象者に該当しているのは一部の児童生徒に限られるとの助言をいただいた。今後は広報先の再検討が求められます。

今後も、同様に活動選択の機会を設定していく予定ですが、繁忙期はスタッフの調整が困難なため、事業の実施時期等を検討していく必要があります。

事業の運営スタッフについては、コロナ禍の影響により予定していた法人ボランティアの参加を依頼できませんでした。しかし、本所学生サポーターと参加者の交流は、より参加者に寄り添った支援になっており、参加者に近い年齢層のスタッフの必要性を感じました。そのため、今後は、大学生などより多くの若い法人ボランティアが事業運営に係わるような体制を整えていく必要があります。

③ 今後の展望

これらの課題を踏まえ少年センターとの連携を密に行い、実施時期や回数を計画していきます。また、参加時の不安が軽減できるように、連携団体等から得た情報を踏まえ、参加者の家庭のニーズに対応できる体制を整えていきたいと考えています。

(2) 地域の実情を踏まえた特色あるプログラム事業

(社会の要請に応える体験活動事業〔防災・減災教育事業〕)

小学生・中学生を対象とした地域の実情を踏まえた体験活動事業 限界突破！プチサバイブキャンプ 2nd

令和3年11月6日(土)～7日(日)

【担当：葛島 隆文、松元 延行】



1) 事業の背景

東日本大震災をはじめ、熊本地震、西日本を中心に広い範囲で発生した平成30年7月豪雨、令和元年東日本台風、令和2年7月に日本各地で発生した集中豪雨などの大規模災害が多発し、我が国において国土強靱化への対応は喫緊の課題です。平成30年12月14日に閣議決定した国土強靱化基本計画においては、「災害時に、自らの命は自らが守るという意識を持ち、自らの判断で避難行動をとれるよう、地域の自治組織等を通じ、継続的に防災訓練や防災教育等を推進する。また、防災ボランティア活動など、地域を守る主体的な活動を促進するため、地域社会等において指導者・リーダー等の人材育成を行うことで、次世代を担う若者の育成に取り組むこと」とされています。

また、小学校学習指導要領(平成29年3月告示)総則第2の2(2)では、「各学校においては、児童や学校、地域の実態及び児童の発達の段階を考慮し、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた諸課題に対応して求められる資質・能力を教科等横断的な視点で育成する」と記され、平成31年3月に改訂された学校安全参考資料『「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育』では、災害等の発生及びその対応を踏まえた学習の重要性が示されています。

このような課題に対して、令和3年度から始まった当機構の第4期中期目標において、国土強靱化基本計画における広域防災補完拠点としての役割、SDGsの目標やESDの基本的な考え方、学習指導要領における総合的な探究の時間における考え方など、次世代を担う青少年のための専門性の高いモデル的な体験活動事業を実施し、実際に使用した教材や指導案などが活用されるよう図り、青少年教育の推進に寄与することが目標に定められ、国土強靱化計画に資する防災・減災教育プログラムの開発・拡充が取り上げられています。

当所においても、施設の特色、長崎県の地域課題を調査する過程で、長崎県教育委員会へのヒアリングや学校教員へのアンケート、地域の方への聞き取り、体験活動に造詣のある外部専門家への相談を行い、長崎県の特質、風土、教育課題等を確認しました。その結果、長崎県は近代において噴火や豪雨による多大な災害被害を受けているにも関わらず、“防災・減災教育が学校・地域においてもあまり進んでいない”ことが分かり、この地域の潜在的な教育的課題の解決に向けて、当所が提供するプログラムの特色である「体験教育・アドベンチャー教育」を基盤とした防災学習プログラムの開発・提供が可能ではないかと考えました。

そこで、今年度は、小学4年生から中学3年生を対象に、防災・減災教育事業の趣旨である「自助・共助を行えるよう主体的に判断し行動する力や、互いに助け合う力を育む」ために本事業を実施することとしました。

2) 事業の趣旨

小学校4年生から中学校3年生の児童生徒を対象に、災害から身を守るために必要な技能を身につけ、防災に対する知識と態度の育成を図る。また、災害時に想定される避難所生活の疑似体験を通して、主体的に判断し行動する力や、互いに助け合う心情を育む。

3) 事業の実施

① 目的

イニシアティブ（課題解決）ゲームと水汲み、非常食体験等のサバイバル活動を組み込み合わせることで、自助・共助を行えるよう主体的に判断し行動する力や、互いに助け合う力を育む。

② 目指すゴール

ア. 試行錯誤を繰り返し、うまくいかなかったとしても失敗から学ぶ姿
イ. 自分ができることを知り、できないと思っていることを少しでも越えようとする姿
ウ. 仲間と力を合わせる姿

③ 対象

小学校4年生から中学校3年生の児童生徒 24名

④ 期日

令和3年11月6日（土）～7日（日）

⑤ 参加者数 参加者20名

学年	小学4年	小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	合計
男子	4	10	0	0	0	0	14
女子	3	1	0	1	1	0	6
合計	7	11	0	1	1	0	20

⑥ 日程

11月6日(土)	11月7日(日)
9:00 受付	6:30 起床、身支度
9:30 オープニングアクト ・はじまりの会 ・オープニングムービー ・イニシアティブゲーム	7:00 ・ミッション 「避難所の撤去」
11:00 移動（キャンプ村）	11:00 昼食
11:30 昼食（持参）	11:30 移動（本館）
12:00 24時間サバイバルキャンプ開始 ・ミッション 「避難所の設営」「食料配給」 「水の確保」「火おこし」	12:00 24時間サバイバルキャンプ終了
21:00 就寝	12:40 ふりかえり
	14:00 クロージング ・おわりの会 ・参加者代表あいさつ
	14:15 解散

⑦ 活動の様子



【オープニングアクト】

出会いの時間です。子供たちは緊張した表情でしたが、班に分かれて自己紹介を行い、徐々に笑顔が増えていきました。オープニングムービーでは、長崎県の災害の様子を見ることで、災害が身近にあることを認識しました。また、持参した持ち物を紹介し、避難所生活に必要な物を考え、24時間生き抜く見通しを持ちはじめた様子でした。



【避難所設営】

段ボールを活用して寝床を作りました。持参したカッターナイフを活用して、パーティションの代わりに衝立を作成したり、下に敷いてベッドの代用にしたりするなど、それぞれが創意工夫してパーソナルスペースを確保し寝床を作っていました。



【野外トイレの設置】

男女に分かれて野外で使えるトイレ作りをしました。プライバシーを確保するため、木陰などの場所を決めるのに時間がかかりました。スコップを使って交代しながら協力して50cm程度の穴を掘り、水やゴミ袋を設置する工夫が見られました。



【水汲み】

飲み水を確保するため、ヤカンや鍋を持って沢筋の水汲み場を目指して歩きました。地図をうまく活用できずに目的地への到着に時間を要しました。1日目は水汲み場に到着できず、川の水(中水)しか確保できませんでしたが、2日目は無事に水汲み場で飲み水を確保し、炊飯を行うことができました。



【話し合い】

自主的に班や全体で集まって話し合うことは少なく、配給された非常食がなくなる問題が発生したり、配給物を分配したりする時には、全員で輪になって話し合いを行いました。全員が合意形成して活動できるように積極的に意見を出し合うことができました。他者の意見を尊重し、主体的に受け入れていく姿勢が見られました。



【火おこし・野外炊事】

薪の組み方や風向きを考え、試行錯誤を繰り返しながら何度も火おこしを行い、1日目の夜に火をおこすことができました。その火で、2日目にスープと米を炊き、炊飯では水を足しながら米の固さを調整できるように工夫していました。また、火に当たることで、体温の低下を防ぐこともできました。

5) 評価

① アンケート結果

Q1. このキャンプがためになったか

満足	やや満足	やや不満	不満
95%	5%	0%	0%

Q2. またキャンプに参加したいと思うか

思う	思わない
100%	0%

② 参加者の声

- ・災害時は、この経験を思い出して生き抜きたいと思う。
- ・身の回りの片付けは身に付けないといけないと思った。
- ・水は大切にしないといけないと学んだ。
- ・こんなにたくさんの協力できるとは思わなかった。
- ・避難してパニックにならない確率を高めることができた。
- ・貴重な経験になった。
- ・家に何を準備しておけばいいかわかった。

6) 成果と課題

① 成果

- ・持参物や服装などの事前準備は、子供たちに活動場所の状況（平地より約5℃低い）を伝えた上で、必要な準備物を自ら考え持参してもらうことができました。1日目のオープニングアクトの中で、24時間生き抜くために必要になると予想される物をグループで話し合い、2日目のふりかえりの中で、災害時に必要だと思った物や不必要だと思った物などを考えるなど、防災への備えを考える時間を設定しました。想定した準備と実際との違いを見つめることで、災害へ備えの必要性を認識し、家庭での日常的な備えにつなげることができました。
- ・災害時の避難所生活において必要な事項を考え、水汲みや火おこしなど試行錯誤を繰り返し活動することができました。自らの安全を確保するための行動が何かを考え、実行できるように集団で話し合い、合意して活動することができました。
- ・「24時間」という具体的な時間を設けたことで、子供たちは見通しを持って避難所体験を行うことができました。パニック行動や社会規範から好ましくない行動は見られず、全員が協力しながら設定時間を生き抜くことができました。
- ・参加者の家族の方にも、事業趣旨説明やオープニング、クロージングに参加していただいたことで、災害時における備えや行動について一緒に考えてもらえる場となりました。保護者の方からは「このような体験は必要だ。」「貴重な体験をありがとうございます。」などの声が聞かれました。
- ・子供たちの満足度は高く、仲間を助けようとする様子や、参加者の「仲間と協力することで24時間生き抜くことができた」という声からも目指すゴールの姿が見られました。

② 課題

- ・新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、3密の回避に気を配りましたが、活動中密になる場面がありました。
- ・参加者は、安心して24時間参加できたという反面、子供たちの危機意識の薄さを感じました。場面設定のレベルを再検討し、災害時要援護者、災害時避難行動要支援者などの設定等、不便な状況を意図的に体験させることが必要だと思われます。
- ・子供たちは、試行錯誤しながら、生き抜くための術を何とか見出していましたが、必要に応じて指導者がその術を教える必要があります。実際、避難所に指定されている学校では校内に備えてある防災備蓄品を小中学生が自らの手で倉庫から搬出し、中身を見て理解し、使用し、残りの数量を考えて分配するという「防災備蓄品の棚卸」が始められており、その使用の仕方も教示していく必要があります。

③ 今後の展望

今回、準備物を自ら考え準備でき、事業後にふりかえりを実施できたという成果を基に、防災シミュレーションを行う事業では、詳しい準備品の案内は不要であると考えます。その一方で、自らの安全を確保するための行動が何かを考え実行できましたが、集団で話し合う場面は少なかったという課題を踏まえて、事業担当者は班や全体で話し合う時間を意図的に設定していく必要があります。さらに、持参したものでも避難に必要なものは多くあり、その使用法を学ぶ機会が必要であり、今後は避難グッズの使い方を体得できる機会を設定していくことを考えています。

防災・減災教育として“自助・共助を行えるよう主体的に判断し行動する力や互いに助け合う力を育む”ことを目的に「体験教育・アドベンチャー教育」を推進していきます。

今後は、イニシアティブ（課題解決）ゲームやサバイバル体験を通して、自ら考え行動する力、仲間と協力する力を身に付けることを目的とした研修支援団体を対象の活動プログラム、または、学校の宿泊学習に活用できるパッケージプログラムを作成し、提供したいと思います。そして、長崎県の実情を踏まえた特色あるプログラムを提供することで、当所のキャッチ・コピーである“人づくり・仲間づくりの諫早”を体現していきます。

(3) 全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」

「地域探究トライアル」 オリエンテーション合宿 in 諫早

【個人参加型】 Create the Future in Isahaya 2021
令和3年7月22日(木)～24日(土)

【学校参加型】 長崎県立平戸高等学校
令和3年7月27日(火)～29日(木)

【担当：大嶋 和幸】



1) 事業の背景

18歳(高校3年生)は選挙権の獲得(2016年施行)、成人年齢の引き下げ(2022年施行)など、以前と比べ、社会に関わることが求められています。また、進路の決定等人生の選択の1つの岐路にあります。そのため、高校生は、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して自らの可能性を高めることが必要になっています。

新しい高等学校学習指導要領では「総合的な探究の時間」の目標において、「探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながらよりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することを目指す」ことが示されました。

以上のような現状を踏まえ、国立青少年教育振興機構(以下、機構)では「体験活動を通じた青少年の自立」を目指し、各施設の立地条件を活かした特色のある活動展開、多様な体験活動の機会を提供するノウハウを生かし、「新たな価値を創造する人材の育成」へのアプローチとして、本制度を創設することとしました。

本所では、機構の方針を受け、昨年度、県内の私立高等学校と連携して、「防災」をテーマに「探究のプロセス」について学ぶことを目的とした「オリエンテーション合宿」を計画したが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、事業中止となった。

今年度は、広く県内全域から連携学校を募るとともに、個人参加型の事業を開催することとしました。

2) 事業の趣旨

高校生が地域づくりや地域の課題解決などに関する体験活動をとおして、課題発見・解決能力を高め、それぞれの実践活動の成果や自身の成長を適切に評価する力を身に付けることにより、新たな価値を創造する人材を育成するとともに、青少年の体験活動に関する社会的な認知を高める。

3) 目標

- ① 「探求のプロセス」に沿った探究活動を実践できる。
- ② 自身が所属する地域の課題を発見し、解決しようとする意欲を高める。

4) 対象

高校1～3年生

5) 事業の実施

① 期日

- ア. 個人参加型 (Create the Future in Isahaya 2021)
令和3年7月22日(木)～24日(土)
- イ. 学校参加型 (長崎県立平戸高等学校)
令和3年7月27日(火)～29日(木)

② 参加者

- ア. 個人参加型 (Create the Future in Isahaya 2021)

学校名	男性	女性	計	備考
長崎県立佐世保商業高校	3	4	7	1年生1、2年生4、3年生2
長崎県立諫早商業高校		1	1	2年生
青雲高校	1		1	1年生
合計	4	5	9	

- イ. 学校参加型 (長崎県立平戸高等学校)

	男	女	計	備考
3年生	3	12	15	女子1名は1日目終了後に早退

※学校参加型として、長崎県立諫早東高校が11月実施に向けて準備を進めていましたが、新型コロナウイルス感染症流行等の影響により、中止となりました。

③ 日程

個人参加型、学校参加型とも同日程で実施しました。

1日目	2日目	3日目
	6:30 起床・準備	6:30 起床・清掃
	7:00 朝食 (前日準備したもの)	7:00 朝食
	8:00 避難所撤去	7:50 宿泊棟清掃、退所準備
	8:50 講義・演習	9:00 発表、講義・演習
10:15 受付	「探究のプロセス」	「仮説についての発表」
10:30 開会行事、施設説明	「気づきや発見の共有」	「実践活動に向けた行動計画」
11:00 アイスブレイク、ガイダンス	11:40 荷物移動	
12:00 昼食 (レストラン)	12:00 昼食 (レストラン)	12:00 昼食 (レストラン)
13:00 講話	13:00 講義・演習、フィールドワーク	13:00 発表、ガイダンス
「災害と避難所生活」	「気づきや発見の究明」	「行動計画についての発表」
15:00 フィールドワーク	「仮説の設定と検証」	「実践活動へのガイダンス」
「野外炊事」	「まとめ方の基礎」	15:00 振り返り、閉会行事
夕食 (野外炊事)	17:00 夕食 (レストラン)	15:30 解散
19:00 フィールドワーク	18:00 講義・演習	
「避難所生活体験」	「発表準備」	
21:00 入浴、就寝準備	20:00 入浴、就寝準備等	
21:45 消灯	22:30 消灯	

※学校参加型 (平戸高校) は、交通渋滞により到着が遅れたため、開会行事、アイスブレイク等を短縮することで、日程を調整しました。

④ 活動の様子

ア. 個人参加型



【開会行事、施設説明、アイスブレイク、ガイダンス】

出会いの時間です。職員の自己紹介、地域探究プログラムの概要等の説明後、自己紹介を兼ねた簡単なゲームでアイスブレイクを行いました。生徒たちは一つ一つのゲームを進めるごとに、学年や学校を超えて親交を深めていました。



【講話（災害と避難所生活）】

日本防災士会会長崎県支部から旭支部長、川浪事務局長を講師としてお招きして、避難所運営ゲーム（HUG）を実施しました。生徒たちは、疑似的に避難所の運営を体験することで、老人、妊婦、障害者などの災害弱者の存在や、個々の要望、突発的な事象に迅速に対応していくことの難しさを感じ取っていました。



【フィールドワーク（野外炊事）】

災害により電気、ガスがストップした想定で、限られた道具と食材を使って夕食を作りました。薪を使って鍋で米を炊く経験もレシピもない中、全員で相談しながら調理を進めました。炊飯に失敗し硬くなったご飯も、高校生らしい知恵でリカバリーし、無事に夕食を食べることができました。



【フィールドワーク（避難所生活体験）】

災害で家を失い、身一つで避難してきた想定で、講義を行っている学習室に就寝スペースを作りました。ブルーシートとわずかのダンボール、毛布1枚で就寝し、突然鳴り響くゲーム音や幼児の泣き声に驚きながら一晩を過ごしました。生徒たちは、避難所生活の不便さや、柔らかい布団のありがたみを感じていました。



【講義・演習（探究のプロセス、気づきや発見の共有）】

2日目は振り返りの時間です。「探究のプロセス」についての講義のあと、生徒たちは、野外炊事や避難所生活体験で得られた「事実（what／何が起きたのか）」をKJ法を用いて共有し、そこから様々な「課題（why／なぜそうなった）」を導き出していました。



【講義・演習（気づきや発見の究明）】

【フィールドワーク（仮説の設定と検証）】

前時の演習で導き出した「課題」を元に、マインドマップを活用して、課題を解決するための「仮説（so what／だからどうする）」を考え、その実現性を検証しました。設定した「仮説」が検証を通してすべて否定され、課題設定からのやり直しを余儀なくされた班もありましたが、最後まであきらめずに活動を続けていました。



【講義・演習（まとめ方の基礎、発表準備）】

「まとめ方」の講義のあと、生徒たちは翌朝の発表に向けて準備を進めました。今回は発表方法をポスターセッション形式としました。掲示資料を模造紙1枚にまとめ、補助資料や発表原稿を準備し、リハーサルを繰り返しながら質を高めていく。生徒たちは自分たちが納得できる発表ができるよう、夜遅くまで作業を続けていました。



【発表（仮説についての発表）】

3日目は発表の時間です。前日に各班で準備したポスターを基に発表を行いました。各班のテーマは「災害弱者とメディア対応」「水の確保」、自分たちに何ができるのかを高校生の目線で考え、分かりやすく発表しました。発表後は質疑応答の時間を設け、意見交換することで、学びの質を高めました。



【講義・演習（実践活動に向けた行動計画）】

【発表（行動計画についての発表）】

本所での「探究のプロセス」の実践を終えた生徒たちは、次に地域での実践活動について考え、KP法（紙芝居プレゼンテーション法）を用いてまとめました。発表は班別に行い、3日間ともに活動した仲間から様々なアドバイスももらっていました。



【ガイダンス（実践活動へのガイダンス）】

【振り返り、閉会行事】

最後に、実践活動に向けたガイダンスを行い、3日間の講義を終了しました。閉会行事で、本所次長からオリエンテーション合宿の修了証を受け取り、晴れ晴れとした顔で、本所を後にしました。

イ. 学校参加型



【開会行事、施設説明、アイスブレイク、ガイダンス】

交通渋滞による到着遅れのため、開始時間が大幅に遅れましたが、職員自己紹介、地域探究プログラムの概要等の説明後、簡単なゲームでアイスブレイクを行いました。生徒たちは長時間の移動で疲れた表情を見せながらも、様々なゲームに楽しく取り組んでいました。



【講話（災害と避難所生活）】

日本防災士会長崎県支部から旭支部長、川浪事務局長を講師としてお招きして、避難所運営ゲーム（HUG）を実施しました。生徒たちは、疑似的に避難所の運営を体験することで、被災者の状況に応じた避難場所の配分や、突発的な事象に迅速に対応していくことの難しさを感じ取っていました。



【フィールドワーク（野外炊事）】

災害により電気、ガスがストップした想定で、限られた道具と食材を使って夕食を作りました。全員が同じものを食べるには、一つ一つの食材が足りないため、班長を中心にメニューを考えながら食材を分配し、スマートフォンで必要な情報を集めながら、各班で協力して調理を進めました。



【フィールドワーク（避難所生活体験）】

災害で家を失い、身一つで避難してきた想定で、講義を行っている学習室に就寝スペースを作りました。ブルーシートとわずかのダンボール、毛布1枚で就寝し、突然鳴り響くゲーム音や幼児の泣き声に驚きながら一晩を過ごしました。生徒たちは、避難所生活の不便さや、柔らかい布団のありがたみを感じていました。



【講義・演習（探究のプロセス、気づきや発見の共有）】

2日目は振り返りの時間です。「探究のプロセス」についての講義のあと、生徒たちは、野外炊事や避難所生活体験で得られた「事実（what／何が起きたのか）」をKJ法を用いて共有し、そこから様々な「課題（why／なぜそうなった）」を導き出していました。



【講義・演習（気づきや発見の究明）】

前時の演習で導き出した「課題」を元に、マインドマップを活用して、課題を解決するための「仮説（so what／だからどうする）」を考えました。どの班も避難所の不便さを課題と感じ、様々なアプローチで「仮説」を立てていました。



【フィールドワーク（仮説の設定と検証）】

避難所体験で使用したダンボールを活用して、前時に立てた「仮説」の検証を行いました。各班で「避難所で快適に過ごすために必要」と考えたのはそれぞれ「パーテーション」「枕」「ベッド」。高校生の発想力、情報収集能力を駆使し、試行錯誤を繰り返しながら、より快適なものを追求していました。



【講義・演習（まとめ方の基礎、発表準備）】

「まとめ方」の講義のあと、生徒たちは翌朝の発表に向けて準備を進めました。今回は発表方法をポスターセッション形式としました。掲示資料を模造紙1枚にまとめ、補助資料や発表原稿を準備し、リハーサルを繰り返しながら質を高めていく。生徒たちは自分たちが納得できる発表ができるよう、手分けして準備を進めていました。



【発表（仮説についての発表）】

3日目は発表の時間です。前日に各班で準備したポスターを基に発表を行いました。温度変化の継続調査やユーザーアンケートの実施など具体的なデータを集め、分かりやすく発表しました。発表後は質疑応答の時間を設け、意見交換することで、学びの質を高めました。



【講義・演習（実践活動に向けた行動計画）】

【発表（行動計画についての発表）】

本所での「探究のプロセス」の実践を終えた生徒たちは、現在、学校の総合的な探究の時間で行っている地域での実践活動についてまとめました。発表は班別に KP 法（紙芝居プレゼンテーション法）を用いて行い、3日間ともに活動した仲間から様々なアドバイスをもらっていました。



【ガイダンス（実践活動へのガイダンス）】

【振り返り、閉会行事】

最後に、実践活動に向けたガイダンスを行い、3日間の講義を終了しました。閉会行事で、本所次長からオリエンテーション合宿の修了証を受け取り、晴れ晴れとした顔で、本所を後にしました。

6) 評価

① アンケート結果（キャンプ全体に対する満足度）

	満足	やや満足	やや不満	不満
個人参加型	100%	0%	0%	0%
学校参加型	36%	43%	21%	0%

② 参加者の声

ア. 個人参加型

- ・一つの物事に対して、長時間考え、みんなと考えを共有し合うという体験は、自分にとって良い刺激になった。
- ・野外炊事では、限られた食材で何を作るのかをとっさに考えるのが難しく、実際に炊き出しを行っている方のすごさを感じることができた。
- ・「探究のプロセス」の考え方は、これからの学習に生かせると思った。この体験を学校や地域に伝え、広げていきたい。
- ・地域のことをたくさん調べ、知ることができたので、このまま次の活動に生かして実践していきたい。

イ. 学校参加型

- ・この合宿で自分のまとめる力、考える力が上がったと思う。これから、災害と向き合い、身を守るにはどうすればよいのか考えていきたい。
- ・避難所での生活は不便だと分かっていたが、実際に体験して、夜中に物音が聞こえてきたら怖いし、床が硬くて眠れなかった。体験をもとに、眠りやすさを追求する活動は楽しかった。

- ・夜中に赤ちゃんの泣き声が突然聞こえてきてとても怖かった。その後、不安で眠れなくなった。

7) 成果と課題

① 成果

- ・本所のカリキュラムは、大規模校との連携を想定し、所内の設備を活用したものであるが、今回の内容でも「探究のプロセス」を十分に体験できることが分かりました。
- ・参加者アンケートで「やや満足」、「やや不満」と評価した理由の多くが、避難所生活体験での不便さでした。これは参加者が「事実」から「課題」を導くための題材として適していたと捉えることができます。実際に、参加者は避難所生活の改善を課題として、仮説を考えていました。
- ・参加者はこの合宿を通して「探究のプロセス」を用いた学び方を習得していたと考えます。

② 課題

- ・参加者の意欲を高める「講話(災害と避難所生活)」の中で『避難所運営ゲーム(HUG)』を実施しましたが、高校生には、講話も含め2単位時間(100分程度)では時間が不足し、やや難易度が高いと感じました。今後は講義内容や講師の人選など、参加者の意欲をより高められるプログラムを検討する必要があります。
- ・フィールドワークで野外炊事や避難所生活体験を行う際、水の使用量の制限や、ダンボールの形状など、実情を想定した環境設定について、再考の余地があると感じました。今後は、参加者の負担、負荷と学びの深まりとのバランスを考慮したプログラムのデザインを再構成することが必要です。
- ・今年度、参加者のうち、8名(個人参加型7名、学校参加型1名)が地域探究アワードへの参加に興味を示していましたが、学業との両立、グループではなく個人での参加という心情的なハードルの高さ等の理由により、本所から地方ステージへのエントリーはありませんでした。今後は、所属する高等学校との連携等、オリエンテーション合宿で高まった活動へのモチベーションを保つための方策の検討が必要です。

③ 今後の展望

- ・今回は、個人参加型、学校参加型ともに参加は少人数でしたが、今後は、新型コロナウイルス感染症流行前に連携に向けた準備を進めていた大規模校で実施した際にも、このカリキュラムで「探究のプロセス」を体験させることができるかの検証を行う必要があります。
- ・次年度から、活動期間やカリキュラム内容を縮小することで、総合的な探究の時間の年間指導計画に組み込みやすくなった新たなオリエンテーション合宿の形態(カリキュラムB)での実施も検討し、県内を中心に広報活動を積極的に進めていきます。

3. 社会の要請に応える体験活動等事業

(1) 親子・児童等を対象に自然体験や読書活動などに親しむ機会と場を提供する事業

子どもゆめ基金 20 周年記念事業 タラッキーキャンプ ～しぜんとあそぼう～

1 回目 令和 3 年 10 月 9 日 (土) ～10 日 (日)

2 回目 令和 3 年 11 月 13 日 (土) ～14 日 (日)

【担当：和泉 志帆】



1) 事業の背景

小学校学習指導要領第 1 章総則 6-3 では、「学校や学級内の人間関係や環境を整えとともに、集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動、地域の行事への参加などの豊かな体験を充実すること」とし、学校教育での自然体験活動の充実を取り上げています。また、生活科の学習指導要領 3-2-(4) には、「公共物や公共施設を利用する活動を通して、それらのよさを感じたり働きを捉えたりすることができ、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かるとともに、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用しようとする。」とあります。

そこで当所においては、小学校 1～2 年生を対象に、自然物に目を向ける活動を通して、子供たちが自然体験活動に興味を持つきっかけをつくるとともに、公共施設での生活を通して、ルールやマナーの大切さに気付くことや規則正しい生活を促すために、本事業を実施しました。

例年、定員 60 名で募集していましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、1 回の定員を 30 名とし、2 回実施することとしました。

2) 事業の趣旨

自然を五感で楽しむ自然体験活動を通して自然に親しむ心を育む。また、規則正しい生活を送る中で「早寝早起き朝ごはん」の定着を促すとともに、自立心を育てる。

3) 目標

- ① 自然とふれあい、自然の中で活動する楽しさを知る。
…「知らなかった」「おもしろい」「きれい」など自然のよさに気付く、感じる。
- ② 規則正しい生活を送ることができる。
…自分のことは自分でやってみる。
- ③ 公共施設でのルールを守ることができる。

4) 対象

小学 1～2 年生

5) 事業の実施

① 期日 1 回目 令和 3 年 10 月 9 日 (土) ～10 日 (日)

2 回目 令和 3 年 11 月 13 日 (土) ～14 日 (日)

※当初、1 回目の実施を 9 月 4 日 (土) ～5 日 (日) に計画していましたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、11 月 13 日 (土) ～14 日 (日) に延期しました。

② 参加者

1回目

	男	女	計
1年生	19	6	15
2年生	3	9	12
合計	12	15	27

2回目

	男	女	計
1年生	12	11	23
2年生	6	0	6
合計	18	11	29

③ 日程

2回とも同日程で実施しました。

1日目	2日目
13:00 受付	6:30 起床、身支度
13:30 始まりの会 仲良くなるゲーム	7:00 片付け、清掃
14:30 わくわく森の探検隊 ・ハイキング ・ネイチャーゲーム ・自然物拾い	8:00 朝食
16:00 ベッドメイキング	9:00 写真ボードづくり
17:40 夕食（レストラン）	10:30 ふりかえり
19:00 入浴	11:00 終わりの会 ・思い出ムービー上映 ・感想発表
20:00 おはなしの会 ・絵本の読み聞かせ	11:30 解散
21:00 就寝	

④ 活動の様子



【始まりの会・仲良くなるゲーム】

出会いの時間では、はじめ緊張した面持ちでしたが、ゲームを行う中、次第に表情が柔らかくなっていました。

「安全に活動する」「人の話をしっかり聞く」「自分のことは自分でやる」というキャンプの約束と、2日間の過ごし方を確認しました。



【わくわく森の探検隊】

森の中で、自然物と触れ合うゲームをしました。実際に葉っぱに触ってみたり、大きさや形を比べてみたりする中で、自分のお気に入りの葉っぱを見つけ、みんなの前で紹介しました。珍しい形の葉っぱを見つけると、「みてみて！」と、とっても嬉しそうに、一生懸命、人に伝えようとしていました。一人一人新しい発見をして、自然に親しみました。



【ベッドメイキング】

自然の家では、寝具の準備も自分でします。体の何倍もある布団を工夫しながら敷きました。早く終わった子は、まだ終わっていない子を手伝うなど、子供たち同士で助け合って準備を進めていました。



【おはなしの会】

就寝前に、スタッフが絵本の読み聞かせを行いました。子供の反応を見ながら、本に興味を持つように読み方に強弱をつけるなど工夫をしました。子供たちは集中して、最後まで静かにお話を聞いていました。読み聞かせ後は、「おもしろかった」「もっと読んでほしい」という声が聞かれました。



【写真ボードづくり】

1 日目に拾った葉っぱや木の枝を使って、集合写真の周りを飾りつけ、写真ボードを作りました。一晩で葉っぱの色が変わっていることに気付くなど、制作中もたくさん観察していました。飾りつけは、それぞれ個性にあふれ、世界に一つだけの作品を完成させました。



【ふりかえり・終わりの会】

お別れの時間です。保護者の方にも参加してもらい、2 日間の活動をまとめた動画を一緒に視聴しました。気づいたことや思ったことなどの感想を、保護者や友達みんなの前で発表しました。最初は緊張していた子供たちが、友達もできて、笑顔で自然の家を後にしました。

6) 評価

① アンケート結果 (キャンプ全体に対する満足度)

満足	やや満足	やや不満	不満
80%	20%	0%	0%

② 参加者の声

- ・1日でこんなにたくさんの友達ができた。
- ・おかあさんやおとうさんがいなくてもさみしくなかった。
- ・ボードを作ったり、みんなと見せ合いっこしたりしたのがたのしかった。
- ・自然にはいろんな生き物がいるんだなと思いました。
- ・キャンプはそわそわする。
- ・いろんな葉っぱがきれいだった。
- ・自然がいっぱいあると思った。自然があると気持ちよくなる。
- ・赤い葉っぱが拾えてうれしかった。

7) 成果と課題

① 成果

初めて親元から離れて宿泊の体験をする子が多く、不安な様子が多くみられましたが、スタッフや新しい友達にもすぐに慣れ、積極的に活動していました。自然について、一つでもいいから興味を持ってもらうことをねらいとしましたが、1回目はたくさんの活動を組み込んだため、子供たちの気づきに着目することや、自然物をじっくり観察できるような声かけや促しを行う時間がとれませんでした。そこで2回目は、プログラムにゆとりを持たせるため、活動を1つに絞り、葉っぱに着目する活動を行うことで、子供たちの気づきを広げることができました。子供たちからは「赤と緑が混じっていてすごい!」「茎にはとげとげとつるつるがある!」「かわいい葉っぱ見つけたよ!」などと、自ら進んで自然を観察し、新しい発見を喜ぶ姿が見られました。

2日間を通して、寝具の準備や荷物の整理、清掃、お風呂や食事の後片付けなど、自分たちで行うよう声をかけたところ、スタッフの援助を必要とせずに、集団生活のルールをしっかり守ることができました。

② 課題

小学校低学年の子供たちにとって、集団生活の中で規範意識や仲間意識などを育てることが大切です。話を聞くときに静かにできず、友達とお話をしたり、活動時に違う場所で好きな活動をしたりする子供がいました。今回は、集団を意識する活動が少なかったことが考えられます。

③ 今後の展望

自分のことを自分でするだけでなく、人の話をしっかり聞くことや、自分勝手な行動は周りに迷惑をかけることなど、集団生活でのルールや、他の人と生活する上で大切なことに気付かせたいと考えます。

低学年が初めて参加するキャンプとして、保護者からのニーズも高い事業です。今回の課題を踏まえて、班での活動を取り入れ、集団を意識した活動の大切さを認識できるような事業を企画したいと思います。

佐賀・長崎 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業
「家族で体験フェスティバル」

令和3年10月23日（土） 日帰り

令和3年10月24日（日） 日帰り

【担当：上戸 正仁】



1) 事業の背景

国立青少年教育振興機構の第四期中期計画に「施設においては、地域の青少年団体と連携して運動を推進し、体験活動の機会と場を充実させるとともに、基本的な生活習慣の確立を目指す」とされており、地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業実施方針に基づいた事業を実施することとしています。

これを背景に諫早自然の家では、青少年教育施設や関係団体、地方公共団体、学校、PTA、NPO法人等と連携し、佐賀・長崎「体験の風をおこそう運動」推進実行委員会を立ち上げ、地域と一体となって体験活動を推進する機運を高める取組を実施しています。本事業は、子供たちに自然体験や生活体験など直接体験する場や機会を、地域団体との協働により提供する取組の一つとして実施しました。

2) 事業の趣旨

家族での体験活動を通して、体験活動の楽しさを体感してもらうとともに、体験活動の重要性の普及と啓発を図る。

3) 目標

- ① 家族で様々な体験活動を行うことで、楽しさを共有し、体験活動の重要性に気付く。
- ② 地域の関係団体が協働することにより、連携を深め、相互の関係性を高める。

4) 対象

長崎県内在住の幼児や小・中・高・大学生のいる家族 各日 35 家族程度
(※新型コロナウイルス感染拡大防止のため長崎県内在住者とした。)

5) 事業の実施

- ① 期日 日帰り 2 日間 1 回目 令和3年10月23日（土）10:00～15:30
2 回目 令和3年10月24日（日）10:00～15:30

② 参加者

10/23（土）

10/24（日）

	男	女	計
未就学児	10	18	28
小学生	20	13	33
中学生	0	1	1
大人(29歳以下)	1	0	1
大人(30歳以上)	22	34	56
合計	53	66	119

	男	女	計
未就学児	14	10	24
小学生	13	23	36
中学生	0	0	0
大人(29歳以下)	1	1	2
大人(30歳以上)	19	30	49
合計	47	64	111

③ 日程（各日共通）

時間	内容
9:30	受付
10:00	開会式 オープニングセレモニー（YUNA on stage）
10:30	活動開始 <ul style="list-style-type: none"> ・キャンプ体験ブース（テント体験、たき火、ハンモック等） ・自然体験ブース（ミニOL、プレOL、ミニWR、ネイチャーゲーム等） ・あそぶ、学ぶブース（昔あそび、薪投げゲーム、遊びリンピック等） ・つくるブース（各種クラフト） ・食べる（食事）ブース（軽食販売、カレーライス） ※途中退館自由
15:30	終了

④ 協力団体

諫早市こどもの城、コスモス花宇宙館、長崎県青少年教育施設協議会、佐賀県少年自然の家、諫早市子ども会育成連合会、長崎県レクリエーション協会、長崎県シェアリングネイチャー協会、日本ボーイスカウト長崎県連盟、ガールスカウト長崎県連盟、NPO 法人インフイーニティー、白木峰高原育成会、長田地区婦人会

⑤ 活動の様子



【開会式】

オープニングセレモニーでは、県立盲学校 6 年生、道辻結那さんの歌声披露を行いました。「TOKYO2020 パラリンピック諫早市採火式」でも歌を披露した道辻さんの優しく澄んだ歌声に、参加者はじっと耳を傾け、感動して涙を流す人もいました。



【キャンプ体験ブース】

気持ちのよい秋空の下、森の中に設置したハンモックに揺られたり、木の実を探したり、ふかふかの枯葉の上に寝転んだり、焼きいもや火起こし体験も行いました。「薪割りやたき火は普段することができないので、子供に体験をさせることができ良かった。」と大好評でした。



【自然体験ブース】

自然の家のプログラムでも人気のオリエンテーリングとウォークラリーについては、幼児でも楽しめるよう縮小版を準備しましたが、意外なことに、子供たちより大人が楽しんでいました。また、親子で森の中の色々な色や形の葉っぱを探す、ネイチャーゲームを楽しみました。



【あそぶ、学ぶブース】

屋外ではむかし遊び（コマ回し、竹馬等）や薪投げゲーム（モルック、クップ）を楽しみました。薪投げゲームは、ほとんどの人が初体験で、親子で競い合う姿が見られました。屋内では遊びリンピックを開催しました。丸太をどれだけ高く積めるかを競い合い、優秀者の表彰も行いました。



【つくるブース】

毎回大好評のクラフトは、今年も多くの方の協力の下、多様なクラフトを用意しました。2日目にはどのようなクラフトができるのか理解してもらうために、オープニングセレモニーの会場に完成品（作品）を展示しました。その結果、どのブースにもたくさんの方が集まりました。その中で特に人気があったのが「グラスサンドアート」です。ガラス瓶にカラーサンドを入れて模様を作り、ジェルで固めて作品を作り上げました。



【食べる（食事）ブース】

地元の婦人会の方が作られる、出汁の効いた昔ながらのカレーライスが毎回大好評です。午前中の活動でお腹を空かした参加者の中には、「美味しい！」とおかわりする人もいました。婦人会の方も大盛りで応えて、笑顔の絶えない昼食会場でした。

6) 評価

① アンケート結果（フェスティバル全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
89%	11%	0%	0%

② 参加者の声（原文掲載）

- ・初めて体験することがいっぱいあり、大いに楽しませて頂きました。ゆなさんのピアノと歌、感激！！声がとても良いですね。
- ・まき割りやたき火は普段することがないので楽しめました。グラスサンドアートでは、きれいな独自の作品を作れました。
- ・クップとモルックは初めてやりましたが、子どもたちが楽しかったようで、何度もやらせてもらいました。
- ・毎年楽しみにしています。コロナの中でできることをたくさん準備して頂いて、楽しませて頂いて、本当にありがとうございます。最高の一日でした。
- ・朝から夕方までずっと子供がはまって製作活動していました。
- ・家族でゆっくり楽しい時間を過ごさせて頂きました。自然の中での活動も良かったです。
- ・すべて回る事ができない程、イベントが企画されていて、次回はまた違うことにも体験したいと思いました。

- ・今回初めてでしたが、とても満足のイベントでした。また次回もぜひ行きたいです。
- ・(食事ブース) 美味しく安価で、子供もたくさん食べてくれました。

7) 成果と課題

① 成果

コロナ禍での開催のため感染対策を徹底するため、参加者を家族に限定し、事前予約で日帰り開催としましたが、2日間で230名もの参加者を迎え実施できたことは、成果の一つです。また、開会式とオープニングセレモニーを実施したことにより、趣旨や注意事項などの案内をスムーズに行うことができるとともに、感動を共有することもできました。参加者の満足度は高く、アンケートでも評価の高いコメントを多くいただきました。コロナ禍で日常の生活も大きく変化し、各種レジャーや外出など、家族での外出機会が減少する中、家族で体験活動の機会が得られたことや、初めて体験するものが多かったことから、改めて家族と一緒に過ごす楽しさや大切さ、さらに体験の重要性を理解してもらう良い機会となりました。

毎年、多くの団体の協力の下、開催している「自然の家フェスティバル」ですが、令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため内容を変更し、協力団体の出展を控えての実施でした。今年度も同様の計画で進めていましたが、今までに協力団体と構築した良好な関係性や、地域とのつながりを維持していくことも重要だと考え、従来どおり多くの団体の協力をいただき開催することにしました。地域との連携をより深めることができ、協力団体からは久しぶりに活動の場ができたこと、喜びと感謝の声をいただきました。

② 課題

今年度は参加者数を限定し、日帰りでの実施したことにより、各ブースでの混雑もなく、参加者からは、ゆっくり楽しめたとの意見が多く寄せられました。また、駐車場においても混雑を心配することなく、経費と職員の負担も抑えることができました。しかしながら、参加者数の限定や日帰りでの実施は、新型コロナウイルス感染症拡大防止を踏まえた対応であり、今後アフターコロナにおける開催を見据えた場合、参加者数の制限の有無や駐車場の確保等について検討する必要があります。さらに、参加者からは、従来のように宿泊を希望する意見もあり、安全管理や職員の負担なども、今後の実施形態によっては検討課題です。

③ 今後の展望

体験フェスティバルは、本所を開放し、終日様々な活動を楽しんでもらうことによって、体験活動の重要性や本所(機構)の存在意義を理解してもらう機会として、また本所の取組を周知するため、さらには地域との繋がりを持続させるためにも必要なイベントです。昨今ではキャンプブームが後押しし、自然体験や家族で過ごす時間について関心が高くなってきており、本所の家族で参加する事業については、定員を超える応募があり人気となっています。今後も参加者のニーズに対応したイベントとなるよう、協力団体とも連絡を取り合い、今回のようにオープニングセレモニーを行うなど、新たな企画を取り入れ、より充実したイベントとなるよう参加者の視点に立ち、グレードアップしていきたいと思っております。

家族で山をさるこう会

第1回 中止

第2回 令和3年10月2日(土)～3日(日)

第3回 令和3年12月11日(土)～12日(日)

第4回 令和4年3月12日(土)～13日(日)

【担当：小野 栄策】



1) 事業の背景

本事業は、美しい自然の残る長崎県多良山系等の登山や散策を通して豊かな自然と触れ合いながら、参加者同士の親睦を深め、生きがいきくりと健康づくりの一助とすることを目的に、平成28年度から実施しています。「さるく」とは、長崎の方言で「ぶらぶら歩く」という意味です。当初は年間8回、比較的利用団体の少ない水・木曜日に事業を実施し、1日目にレクリエーションや登山についての勉強会、参加者同士の親睦会を行い、2日目の登山、散策へとつなげるプログラムが定着し、参加者の声を生かした内容構成が好評を博していました。継続して参加する方、退職後のスタートするきっかけに参加する方、生きがいきくりで参加する方等、様々な想いを持って参加してくださり、四季折々の風景に感動しながら、参加者同士和気あいあいの雰囲気を実施していました。

今年度から、様々な立場の人たちが気軽に参加できるように土・日の開催にし、家族対象の事業として内容を一新することとしました。また、今後の運営の幅を広げるために、公立青少年教育施設と連携し、多良山系にこだわらず、長崎県内の様々な山に目的地を広げて実施しました。

2) 事業の趣旨

長崎県内の公立青少年教育施設と連携し、県内周辺の山や散策路の登山・トレッキングを行うことで、自然に親しみ登山に興味を持たせるとともに、家族・スタッフ・参加者同士の親睦を深め、健康づくりの一助とする。

3) 目標

- ① 長崎県内の公立青少年教育施設と連携し、登山プログラムの企画運営を行い、スタッフ交流を積極的に図る。
- ② 県内(連携施設)周辺の山や散策路の登山・トレッキングを行うことで、自然に親しみ登山に興味を持たせる。
- ③ 登山講師を招聘し、登山講座、安全指導を実施し、基本的な登山技術を身につける。
- ④ 参加者、スタッフ同士の親睦を深め、コミュニケーション力を高める。

4) 対象

自然や登山に興味・関心がある方とその家族、一人でも参加可能(20名程度)

5) 事業の実施

① 事業計画

宿泊場所	目的地、日程等
諫早青少年自然の家	目的地：五家原岳（諫早） 開催日：令和3年5月22日（土）～23日（日） ※新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止
千々石少年自然の家	目的地：普賢岳（雲仙） 開催日：令和3年10月2日（土）～3日（日）
佐世保青少年の天地	目的地：烏帽子岳（佐世保） 開催日：令和3年12月11日（土）～12日（日）
世知原少年自然の家	目的地：安満岳（平戸） 開催日：令和4年3月12日（土）～13日（日）

② 参加者

目的地	学年、人数、男女別			
第2回 普賢岳	幼児	3名	(男子2名、女子1名)	合計 26名
	小学生	11名	(男子7名、女子4名)	
	大人	12名	(男性2名、女性10名)	
第3回 烏帽子岳	幼児	3名	(男子2名、女子1名)	合計 12名
	小学生	2名	(男子1名、女子1名)	
	大人	7名	(男性1名、女性6名)	
第4回 安満岳	幼児	2名	(男子2名、女子0名)	合計 15名
	小学生	5名	(男子4名、女子1名)	
	中学生	1名	(男子1名、女子0名)	
	大人	7名	(男性2名、女性5名)	

③ 基本プログラム

※各回の日程は基本プログラムを基に、連携施設と調整して決定

1日目	2日目
15:30 長田みのり会館集合	6:30 起床
16:00 宿泊施設へ移動	7:00 朝食
17:00 到着、受付、開会式	8:00 清掃、出発準備
17:30 入所オリエンテーション	8:30 宿泊施設出発
18:00 夕食	9:30 登山開始
19:00 宿泊施設での体験プログラム	12:00 山頂（昼食）
20:00 入浴	13:30 下山
21:00 自由時間	14:30 宿泊施設到着、閉会式
就寝	16:00 長田みのり会館到着、解散

④ 活動の様子



【普賢岳登山】

標高 1,359 メートルから大パノラマを体感でき、島原半島の自然の美しさと力強さを感じ取れる普賢岳を目的地としました。

千々石少年自然の家では、広場から星空観察をしました。天候にも恵まれ、施設職員の丁寧な説明があり、天体望遠鏡を使い、月や木星、土星などを観察できました。また、出発の準備として登山講座を行いました。下見で調査した見所や難所を事前に周知しておくことで、山登りへの不安解消を図り、目的意識を持って登山に臨めるようにしました。

普賢岳登山では、参加者の登山歴、年齢、体力などに応じて2つの登山チームを編成して登りました。また、途中のリタイアに対応できるよう複数の登山ルートを設定しました。仁田峠から見える火砕流の痕跡、バードウォッチング、風穴からの涼しい風、鳩穴休憩スポットからの絶景、間近に見ることができる平成新山、頂上の反り立つ岩など見所満載の登山ルートでした。

山頂で、全員で撮った集合写真は、苦勞を乗り越えて登り切った家族の笑顔がいっぱいで、達成感に満ち溢れています。

【烏帽子岳登山】

烏帽子岳は標高 568 メートル、佐世保富士と呼ばれています。山頂周辺部は西海国立公園に指定され、360 度の眺望が開け、佐世保市中心部や九十九島を一望することができます。その中腹に位置する佐世保青少年の天地では、施設自慢の移動天体観測車「ビュースター」で星空を観察したり、展望デッキから佐世保の夜景を堪能したりしました。

隠居岳、烏帽子岳登山では、参加者の登頂意欲が途切れないように、全行程や休憩ポイントなどを出発前に説明し、見通しを持って歩けるようにしました。また、親子のペースで歩けるように、職員を等間隔に配置し、常に声かけを行いながら支援にあたりました。その結果、歩行距離約 10 km以上の道のりを、親子や参加者同士で励まし合いながら全員で完歩することができました。

おいしい昼食、微笑ましい雑談、スタッフの笑顔、乗馬施設から垣間見た馬、山頂からの景色などに癒されながら参加者は登山を楽しんでいました。ゴールした証として施設スタッフから木製のメダルを頂き、思い出の一つとなりました。

登山事業に複数回参加した家族も多く、前回の登山の経験を生かされたこと、何よりも子供たちの成長が感じられたことを喜んでいました。全員、無事にけがなく帰ってこられたことが一番の成果だと登山ガイドからも好評をいただきました。



【安満岳登山】

標高 534 メートルの安満岳は、平戸最高峰の山です。安満岳はもともと、休みの岳といい平戸鎮護の霊山として崇められていました。歴史的な神社、遺跡が数多く残り、山頂からは絶景展望が広がります。登山だけではなく、歴史散策も楽しめるこの山を目的地としました。

世知原少年自然の家では、登山について参加者が、聞きたいことや不安、悩みについて、オレンジハイキングクラブ登山ガイドの方がアドバイスする形で座談会を開きました。「登山に適した服装は」「持っていくべき持ち物は」「登山に役立つ携帯アプリの使い方」など今後の登山に役立つような情報交換を行いました。

コース設定の際、参加者が見通しを持って山登りに臨めるように、安満岳周辺の観光地を訪れ、今から登る山を下から眺める活動からスタートしました。「今から登る山がはっきりイメージできたこと」また、山頂から「出発前に訪れた道の駅や橋が確認できたこと」で時間的、空間的つながりが生まれました。また、食事場所として設定した鯛ノ鼻自然公園は、展望台、駐車場、トイレ、広場がきれいに整備されており、家族団らの場所として最適でした。

コロナ感染拡大状況が終息に向かい、春の天気の良い週末に、たくさんの家族で登山を楽しむことができました。

6) 評価

① アンケート結果（研修全体に対する満足度）

目的地	満足	やや満足	やや不満	不満
普賢岳	100%	0%	0%	0%
烏帽子岳	100%	0%	0%	0%
安満岳	100%	0%	0%	0%

② 参加者の声

- ・はじめて、土星の輪を見ました。とてもきれいな星空を見ることができて、感動しました。夜、大きなお風呂に入れて気持ちよかったです。（普賢岳編参加者）
- ・岩の登り方を優しく教えてくれました。励ましてくれたり、声をかけてくれたりして安心感がありました。（普賢岳編参加者）
- ・自分たちだけでは、山登りをしようと思いませんでした。子供が下りにくそうにしていた時、しっかり指導していただきました。（普賢岳編参加者）
- ・大変有意義でした。子供がぐずっても皆さんがフォローしてくださりました。靴や手袋、リュックなど山登りの勉強をして取り組もうと思いました。（烏帽子岳編参加者）
- ・2回目の参加ですが、前回より歩きやすい山だったので良かったです。説明も的確でわかりやすかったです。みなさんととても優しいです。（烏帽子岳編参加者）
- ・登頂手前の石の道がすごく神秘的でとても元気をもらった感じでした。5歳の子も一緒に登れてよかったです。（安満岳編参加者）
- ・コロナ禍が続き、休日に家族で登山をやってみたいと思っていました。知らない山は不安なので、今回はとても役に立ちました。（安満岳編参加者）

7) 成果と課題

① 成果

- ・「さるこう会」を長崎県内の各公立青少年教育施設と協力して行い、スタッフ間の連携が図れました。特に、他施設の職員が事業に参画し、コース設定の企画や参加者の安全管理、自施設のプログラムの提供などを行えたことは、とても意義深いことでした。
- ・親子参加型の登山プログラムに内容を一新し、はじめての登山への不安解消、子供たちの困難克服体験、山頂到達による達成感、参加者同士の交流などを図ることができ、登山への興味・関心が高まりました。
- ・登山ガイドからのアドバイス（コース選択、準備運動、安全指導、休憩の取り方、登山の楽しみ方など）をプログラムに反映できました。

② 課題

- ・幅広い年齢層、登山経験の違いなど参加者の実態を生かした登山ルートの設定を慎重に行っていく必要があります。
- ・年間を通して、計画的な登山講座の位置づけが必要です。
- ・今回は、施設連携を重視して登山ルートを考えましたが、参加者のニーズを把握し、それに見合ったプログラムを提供する必要があります。

③ 今後の展望

今年度に育んだ他施設との事業連携の結びつきを維持し続けるために、本所職員も登山事業の運営に参画し、1つの登山事業を両方の施設で募集し、協働で実施するなど、登山事業の連携方策を探っていきたいと考えています。

また、本所で提供している五家原岳登山プログラムについても、五家原岳の魅力を伝えるとともに、困難克服体験、登山者同士の助け合い、登頂時における達成感、安全意識の向上など登山体験が持つ教育効果を広く発信し、多くの団体、青少年の利用につながられるよう定期的なイベント等の実施も考えたいです。

さらに、蓄積された登山事業の運営技術を今後引き継ぐために、自然の中を「歩く」活動を中心に据えた事業を検討したいです。登山、ハイキング、トレッキングが持つマイナスイメージを払拭するためにも、「愛犬と散歩しよう」「山菜を探して料理しよう」「歴史散策」など、参加者が好んで歩けるような活動を取り入れ、青少年の体力低下という課題へ向き合いたいと考えています。

子どもゆめ基金 20 周年記念事業
諫早青少年自然の家 キャンプ Week
～夏休み親子でキャンプばしてみんね！～



令和3年7月19日（月・祝）～ 31日（土）

【担当：小野 栄策】

1) 事業の背景

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、学校が夏休みに入る7月下旬から8月上旬の学校宿泊団体の利用中止及び日程変更が相次ぎました。そのため、繁忙期であるこの期間の利用が例年に比べ大きく下回り、利用促進が大きな課題となりました。

また、本所では「キャンプをもっと身近なものにしたい」「キャンプで家族団らんのひと時を過ごしてほしい」と考え、令和元年10月から第3日曜日を当所の「キャンプの日」に制定し、家族の体験活動を推進しています。その効果から、家族を中心にキャンプを目的とした利用が少しずつ増加しています。

そこで、近年のキャンプブームや親子キャンプのニーズの増加に応えるとともに、子供たちに、自然体験活動の機会を提供するために、利用キャンセルが相次いだこの期間に親子でのキャンプ泊体験「キャンプ Week」を新たに企画、実施しました。

2) 事業の趣旨

親子でのキャンプ体験を通して、体験活動の楽しさを体感してもらうとともに、体験活動の重要性の普及と啓発を図る。

3) 目標

- ① 親子でのキャンプ体験を通して、普段以上に家族が会話する機会を増やす。
- ② 野外炊事やテント泊体験を通して、自然体験活動の楽しさを体感する。
- ③ 子供が活動する姿を見ることで、体験活動の重要性に気付く。

4) 対象

幼児や小・中・高・大学生のいる家族 1日6家族まで（先着順）

5) 事業の実施

① 参加者

7月19日（月）～20日（火）	1家族（2名）
7月20日（火）～21日（水）	
7月21日（水）～22日（木）	4家族（12名）
7月22日（木）～23日（金）	6家族（26名）
7月23日（金）～24日（土）	6家族（23名）
7月24日（土）～25日（日）	6家族（27名）
7月25日（日）～26日（月）	3家族（10名）
7月26日（月）～27日（火）	1家族（3名）
7月27日（火）～28日（水）	
7月28日（水）～29日（木）	1家族（5名）

7月29日(木)～30日(金) 3家族(12名)
 7月30日(金)～31日(土) 6家族(27名)
 合計 37家族(147名)

② 日程

施設説明、テント設営説明、野外炊事説明(入所日)、テント撤収・物品返却(退所日)以外は、基本自由時間としました。

【入所日】	【継続日】	【退所日】
適宜 受付、日程確認 14:30 事務室前集合、キャンプ村移動 15:00 はじまりの会、施設説明 15:30 テント設営、寝袋等貸出 16:00 野外炊事説明、食器等貸出	終日 自由時間	9:00 テント撤収、食器・物品返却 本館移動 10:00 退所手続き

③ 活動の様子



【はじまりの会】

キャンプ村での利用スケジュールを参加者に理解してもらうために、本館で受付が終わった家族は、キャンプ村に移動し、はじまりの会、入所オリエンテーションを行いました。はじまりの会では、スタッフ・参加者の自己紹介を行い、「みんなで助け合いキャンプを楽しもう」を合言葉に家族間交流が活性化するように確認を行いました。その結果、少人数で参加した家族や活動に困った家族に声かけをしたり手伝ったりする姿が多く見られました。

入所オリエンテーションでは、キャンプ村施設説明、日程説明、スタッフの役割、利用の約束、緊急時の対処方法などを説明し、参加者が不安にならないようにしました。



【テント設営】

スタッフによるテントの張り方、片付け方の説明を聞いた参加者は、早速つどいの広場に集合して、テントの設営をはじめました。風で飛ばないように杭を打つ子、雨除けのフライシートを張る子、ポールをつなぐ子、寝袋を倉庫から運ぶ子など、小さい子供たちにも役割を与えながら家族で協力してテントを張っていました。「意外と簡単に張ることができました」「子供たちが手伝ってくれたので頼もしかったです」「困っていたらスタッフの方が手伝ってくれました」など、自分たちの力で張ることができた喜びを感じていました。参加者の中には、初めてテントを張った方や購入したばかりのテントを持参した家族もいて、次のキャンプにつながる体験ができました。



【野外炊事】

テントを設営したあとは、いよいよ各自が持参した食材を使った、夕食（次の日の朝食も含む）作りです。最初に、親子で協力してテーブルの準備を行いました。小さい子供たちも喜んでお手伝いをしていました。調理やかまど準備では、スタッフの安全指導のあと、親が見守る中、薪を割ったり、火をつけたり、食材を切ったりして料理を完成させました。「初めて野外で調理をしました」「薪割りや火付けは、最初怖かったけど、だんだん慣れて簡単になりました」「子供たちがよく手伝ってくれて助かりました」「仕事をたくさん任せました。頼もしく感じました」などの感想を聞くことができました。

【自由時間】

基本的に、スタッフが参加者に関わるテント設営と、野外炊事の安全指導以外は、できる限り家族で自由に過ごす時間を増やすように努めました。持ってきた遊び道具で楽しんだり、昆虫採集を行ったり、焚火を囲んで団らんしたりするなど、親子で思い思いに触れ合い、楽しく過ごす様子が随所に見られました。

6) 評価

① アンケート結果（キャンプ全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

② 参加者の声

- ・思った以上に暗かったです。明りのありがたさを体験できました。
- ・次回はサポート無しでテント泊をやりたいです。次もやりたいです。
- ・空き時間にこんな活動がしたいです。（沢登り、虫取り、キャンプファイヤー、ナイトウォーク、森探検、ピザづくり、ハンモック体験等）
- ・思ったよりも忙しかったです。時間がたりませんでした。
- ・何の準備もなくキャンプができて良かったです。
- ・他の家族と仲良くなれました。コミュニケーションがとれました。
- ・キャンプに躊躇していましたが、一步を踏み出せました。
- ・みんなで掃除をする時間があればよかった。
- ・施設が整っていました。器具が揃ってました。

7) 成果と課題

① 成果

昨今のキャンプブームの影響もあり、延べ147名の参加がありました。参加者の満足度も一様に高く、活動に満足されていました。初参加の方が、今回の経験によりスキル

アップが図られ、次回への参加意欲が高まったこと、複数回参加された方は、キャンプの見通しが持たれており、準備の手際がよく時間の有効活用が図られていたことは大きな成果です。今回は多くのスタッフがキャンプの支援にあたり、参加者の声を聞いたことで、その後の団体対応に役立てることができました。

② 課題

親子の関りを高める、家族間交流の機会を増やす、体験活動のノウハウを学んでもらうなど、キャンプを実施するときのスキルアップ講座などを設定する必要があります。

③ 今後の展望

日頃のキャンプ村の家族利用、キャンプの日を含めて当施設を複数回利用する家族も増えてきました。最初は、テント設営、料理の準備、道具の片付けなど時間のかかっていた活動が、やり方や見通しを持てたことで短時間に終わるようになりました。その結果、各家族にゆとりが生まれ、この時間の有効活用が利用満足感、リピート率の向上につながると考えます。「何をしたらいいの」と迷う家庭も多いです。また、休日も両親が勤務のため、母親（父親）のみの家庭、ひとり親家庭の参加も多く、子供の相手をしながらのキャンプは気苦労もたえません。その解消のため3つの方法を考えています。

まず、キャンプに精通した講師を招聘して、キャンプを楽しむ技能講座を定期的で開催します。また、親子で楽しめる自然体験活動を具体的に紹介してもらいます。昨今、流行りの一人キャンプのノウハウを学ぶことも効果的だと考えます。

次に、家庭で取組めるアクティビティを増やし、ニーズにこたえられるようにアイデアを出していきたいと思えます。例えば、昆虫の森づくり、クラフト材料マップ、沢ガニ祭、蛍を見に行こう、星空を見よう、火付け体験、インスタウォークラリーなどを提案していきます。

最後に、組織化を図っていきます。キャンプ初心者、中級者、上級者に分け、初心者をターゲットに上記の取組を展開し、参加登録を行い他の利用者と区別します。手厚い指導、情報の提供などを行い、リピーターとなるまで支援していこうと考えています。

子どもゆめ基金20周年記念事業

われら 沢登り 探検隊

令和3年9月23日（木）秋分の日

【担当：小野 栄策】



1) 事業の背景

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により自然体験や体験活動等の機会が減少しており、本施設においても、昨年度から宿泊利用団体のキャンセルや教育事業の規模縮小・中止などが相次ぎ、年度当初に計画していた体験活動の実施が困難な状況でした。

そこで、コロナ禍においても、子供たちの体験活動の機会を安全安心に提供するために、当初の看板プログラムである沢活動を、感染防止対策を講じながら実施することとしました。

2) 事業の趣旨

小学校5・6年生の子供たちが、自然体験活動（沢登り）等を通して、自然体験への関心を高めるとともに、友達と協力することの大切さに気付く。

3) 目標

- ① 積極的に友達と関わり、協力して活動することができる。
- ② 自然の大切さや、自然の中で体を動かす楽しさを知る。
- ③ 自分の周りにいる人や物、自然に対して、感謝や思いやりを持った行動ができる。

4) 対象

小学校5年生・6年生 30人

5) 事業の実施

① 参加者

15名（男子9名、女子6名）

	男子	女子	合計
小学5年	9	0	9
小学6年	0	5	5
合計	9	5	14

② 日程

時間	内容
9:00	受付
9:30	始まりの会 仲良くなるゲーム
10:30	沢登り 準備
11:00	沢へ
12:00	昼食（キャンプ村）

13:00	沢登り（深海川コース）
16:00	自然の家へ
16:30	振り返り 終わりの会
17:00	自然の家解散

③ 活動の様子



【仲良くなるゲーム】

受付、始まりの会が終わり、緊張感が漂う雰囲気を和ませるために、仲良くなるゲームを行いました。顔も名前も知らない子供たち同士が、気軽に話せるように、じゃんけんゲームや、円になって自己紹介ゲームを行いました。

個人個人の名前を覚えたところで、集団でのゲームを行いました。事前に性別や年齢、参加経験をもとに班を構成し、子供たち同士の間隔を空けるなどの感染症予防対策を施しながらゲームを進めました。同じ動きをする、並び替える、自分の思いを伝える、助け合うなど、参加者同士の関りを重視した活動を仕組むことで、一つの課題をみんなで解決しようとする姿が見られました。ゲーム進行のスタッフが沢登りにつながるような活動の意味付け、価値付けを行い、「みんなで助け合いながら沢のゴールを目指そう」という意識が高まりました。



【沢登り安全指導】

沢登りは危険度の高い活動です。転倒や滑落によるけが、熱中症や低体温症による体調不良、危険な動植物など、参加者が注意しなければならない内容が多いため、その一つ一つを具体的にイメージできるように挿絵を用いながら説明を行いました。

また、寒さやけが対策はもちろん、水難事故にあわないようにヘルメットやライフジャケットを装着し、その役割を理解させながら安全管理に努めました。

さらに、今回の目標でもある「協力」を意識づけるために、班やバディで行う安全対策や沢での手助けの仕方などを考えました。また、活動中もコースの途中で立ち止まりながら、岩場の状況に合わせた安全指導を行いました。子供たち同士の声掛けや相手を思いやる行動が随所に見られました。





【沢登り】

本所にある3つの沢コースの中で、最も難易度の高い「深海川コース」にチャレンジしました。このコースは、水深が深く、子供たちの行く手を遮るように巨岩が立ち並んでおり、速い水流でなかなか一人では進めないコースです。集中力を失うと岩から足を踏み外したり、滑りやすい苔で転倒したりする危険もあります。

より安全性を確保するために、2つのグループに分け、スタッフをそれぞれに配置し、コース取りの選択やその場にあった登り方、困った友達への対処方法などを考えさせながら、時間をかけて進みました。午前中の仲良くなるゲームの効果もあり、「大丈夫」の声掛けや、登ることに苦勞する子供たちへの働きかけなど、友達を一人にしない行動が随所に見られました。

日頃できない非日常体験に満足していました。

【振り返り】

活動の振り返りは、まず一人一人が今回の沢登り体験で感じたことを個人やグループでまとめ、全員が円になって発表しました。参加者が少人数だったこともあり、しっかりと時間をかけて行うことで、参加者一人一人が真剣に思いを伝え、事業を締めくくることができました。子供たちの発表では、「協力」「挑戦」「安心」などの言葉が数多く聞かれ、友達の思いやりのありがたさを強く感じていました。

6) 評価

① アンケート結果（キャンプ全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

② 参加者の声

- ・コロナ禍の中、知らない人とコミュニケーションをとって、協力してたくさん活動をして、思い出をつくることができました。もっとこの場を利用してたくさん友達をつくりたいと思いました。
- ・登れない岩があったら、友達が上から手を出してくれて岩を登れたので、うれしかったです。自然の家のスタッフもやさしくしゃべりやすかったからよかったです。また違うキャンプに参加したいです。
- ・自分がやったことないことばかりで、挑戦しようと思う気持ちがわいてきました。
- ・みんな一致団結して行動できました。
- ・沢登りは、一人ではなく二人や三人で協力しないといけないことが分かった。
- ・スリル満点でした。本当に探検隊みたいで、また来たいと思いました。
- ・まず、ゲームをしました。その活動がなかったら沢登り中に協力することができないと思いました。協力を意識できたので、ゲームがあつてよかったと思いました。
- ・みんなで助け合って仲が深められました。自然と触れ合うことができよかったです。

7) 成果と課題

① 成果

- ・参加者の満足度は高く、事業の目標である「協力すること」「友達を思いやること」「自然を満喫すること」なども高い評価でした。
- ・子供たちの意識が連続して発展するように、プログラムの組み方を工夫しました。仲間づくりゲームから沢登り体験へとつなげる展開は、子供たちが協力することを体験から学び、沢登りの場面で自然と力を合わせることができるなど効果的でした。
- ・コロナ禍の中、感染症対策として今回は特に三密を避けた仲間づくりゲームや話し合い活動に留意して行いました。

② 課題

- ・今回は、仲間づくりゲームを室内で行いましたが、屋外で行うなど、時と場所、内容を工夫し、沢登りにつながる活動プログラムをさらに充実させていく必要があります。
- ・沢登りは季節限定の体験活動であるので、沢登りを行えない時期にも同様の活動を実施できるよう開発した「岩場登り」においても、仲間づくりとのパッケージングが有効であるか検証する必要があります。

③ 今後の展望

現在、多くの利用団体が行っている沢活動の流れは、自然の家職員が安全指導を行い、団体が安全具を装着し、各沢コースまで歩いて行きます。一通り沢登りを行った後は、本館まで戻ってきて着替えを行い、帰路に就くというパターンが一般です。少し時間に余裕のある団体は、仲間づくりゲームを行い、友達同士が「協力すること」「助け合うこと」など、体験を通してイメージを持たせて、沢登りへと発展していきます。より多くの団体が、沢登りを集団づくりに意識して取り組むためにも、この仲間づくりゲームを移動中の適切な場所で行ったり、沢登りで「協力すること」を疑似体験できるプログラムを開発したり必ず振り返りを位置づけたりして、プログラムを工夫していきたいと考えております。

また、沢登り活動で、どんなプログラムを提供すれば仲間づくりプログラムに発展するか、職員の考える場が必要です。そこで、沢登りを行っている近隣社会教育施設にも声をかけ、沢登りに精通した講師を招き、研修会を開く中で、沢の中でも場所（水の深い場所、岩場、滑りやすい場所、水生生物の存在、流れがある場所等）に応じたプログラムを提供していきたいです。

さらに、今年度新規コースとして開発をめざしていた沢登りロングコースの設置をめざしていきます。このコースでの沢のバリエーションは豊富で、様々なアクティビティが開発されると考えます。練習コース、本番コースの運営など、当面は、教育事業での活用をめざして可能性を広げていきたいと考えています。

子どもゆめ基金 20 周年記念事業

国立諫早青少年自然の家 in 長崎 「まち day キャンプ！」

～出張！キャンプの日～



- 1 回目 令和 3 年 9 月 25 日 (土) 日帰り
- 2 回目 令和 3 年 10 月 30 日 (土) 日帰り
- 3 回目 令和 3 年 11 月 27 日 (土) 日帰り
- 4 回目 令和 4 年 1 月 29 日 (土) 日帰り (中止)

【担当：松元 延行】

1) 事業の背景

(独) 国立青少年教育振興機構では、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により自然体験や体験活動等の機会が減少していることを踏まえ、必要な感染防止対策を行いながら安全安心な体験活動等の重要性を広く普及・啓発するため、親子・幼児等に自然体験や読書活動などに親しむ機会や青少年が様々な体験活動を通して自己成長や自己実現等を図ることができる場の提供等を目的として事業を実施しています。

特に、不要不急の外出を控えた生活が長引き、家族そろっての自然体験活動や体験活動等の機会減少は深刻であると考え、市街地における自然体験活動や体験活動等の機会と場の提供を行うべく、市街地にある NPO 法人と連携し、身近な場所で気軽に行えるデイキャンプを、感染防止対策を講じながら実施することとしました。

2) 事業の趣旨

自然体験活動や読書活動などを通して、体験活動の楽しさを体感してもらうとともに SDGs について知ってもらい、体験活動の重要性や SDGs の普及と啓発を図る。

また、本事業を通じて関係団体との連携を図り、市街地における体験活動の定着・発展を推進する。

3) 目標

- ・「キャンプって楽しいな」「また、キャンプしたい」と、参加した家族が感じることができる。
- ・家族の団らんを図る。
- ・市街地での体験を通して関係団体と連携できる。

4) 対象

幼児から大学生のいる家族 10 組

5) 事業の実施

- ① 期日 1 回目 令和 3 年 9 月 25 日 (土)
- 2 回目 令和 3 年 10 月 30 日 (土)
- 3 回目 令和 3 年 11 月 27 日 (土)
- 4 回目 令和 4 年 1 月 29 日 (土) 中止

※1 月 29 日 (土) に追加実施を計画しましたが、新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴い、長崎県にまん延防止等重点措置が適用されたため、中止しました。

② 参加者

開催日別内訳

	家族	人数合計
1回目 令和3年9月25日	4	34
2回目 令和3年10月30日	5	51
3回目 令和3年11月27日	9	58

※1回目は、共催団体とのプレキャンプ

③ 日程（各日共通）

10:00	自然体験活動コーナーの運営 (薪割り、火おこし、たき火、畑作体験、木のぼり、ハンモック、スラックライン、クラフト活動)
15:00	自由解散

④ 会場

長崎シビックホール（長崎市）

⑤ 活動の様子



【薪作り、火おこし、たき火】

会場には、3～4つのボンファイヤー台を設置し、ファイヤー台に火をつけるために薪作りから行いました。参加者は朽ちた樹木の支柱をノコギリで切り、ボンファイヤー台に集めた後に火をつけ、持ち寄った食材を焼いて食べていました。他の家族が持ってきた食材を見て、「次回は自分たちも持ってこよう。」などの会話も聞こえてきました。



【畑作体験】

今後通年で自然体験活動ができるよう会場のシビックホールの周りに、参加者と一緒に畑づくりを行いました。鍬を使って土を耕し、岩や木の根を掘り起こし、ゴマの種などを植えていきました。農家にとってはつらさが勝る作業も、子供たちにとってはとても楽しい土いじりであり、休憩や他の活動も忘れて一日中畑づくりに夢中になっていました。



【木のぼり、ハンモック、スラックライン】

畑の横にある小さな林には、木のぼりとハンモック、スラックラインのスペースを設置しました。NPO 法人スタッフが子供たちと一緒にハンモックや木登りの縄はしごを設置し、大人が乗って安全を確かめた後、子供たちに提供を行いました。子供たちは、自分の身長より高い木登りに挑戦したり、大人もハンモックで一休みしたりしました。



【クラフト】

自然の家から持ち込んだ材料や、会場周辺で手に入れた材料を使ったクラフトブースを設置し、自由にクラフト活動ができるようにしました。シビックホールの周辺では、どんぐりが多数手に入ります。どんぐりコマや、トトロの置物、その他自由な発想から作成するクラフトを多数制作し、作った作品を持ち帰っていきました。

6) 評価

① アンケート結果（キャンプ全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
77%	23%	0%	0%

② 参加者の声

- ・（市街地である）長崎市在住なので、近くでこのような機会があると気軽に参加できて助かります。
- ・子供も大人も大変楽しみました。特に、畑作りは夢中になりました。
- ・街中でもキャンプが楽しめるのは良い。今度は、自然の中でキャンプをしたい。
- ・普段は子供が遊んだり活動したりする姿を見ているだけでしたが、このキャンプでは自分も子供のように一緒になって遊んでしまいました。

7) 成果と課題

① 成果

市街地を活動拠点にしている NPO 法人に企画段階から参画いただいて計画しました。内容の検討にあたっては、NPO 法人の事務所周辺のフィールドで行える活動であること、今後も、NPO 法人が事業を継続実施できる活動であることを基準に企画しました。

また、運営も NPO 法人及び NPO 法人が集めたスタッフ中心で行い、本所職員は安全管理やスタッフを支援・指導する立ち位置で参加しました。第 1 回の時に、どのように参加者に接すればいいのか分からずにいた NPO 法人のスタッフも、回を重ねるごとに、安全管理として注意すべき点や、子供に分かりやすく説明する言葉かけ、どのような時に子供がけがをするのかに気付くようになり、3 回目のキャンプでは、堂々とした立ち振る舞いで子供に接する姿が見られました。

今回、市街地で行う自然体験活動を展開しましたが、キャンプは大変好評で、参加募集や参加者の反応を見る限り、市街地に住む家族においても、自然体験活動に対する関心の高さが伺えました。

② 課題

今年度は連携した NPO 法人に事業運営ノウハウを提供し、次年度以降、法人単独で事業を実施できるように支援を行ってきましたが、NPO 法人の専属スタッフは 1 名しかおらず、継続運営には NPO 法人のボランティアスタッフの協力が不可欠です。

今後も入れ替わりが多い NPO 法人のスタッフに対して、安心・安全に事業を運営できるよう、継続的な安全指導の支援が必要であると考えます。

③ 今後の展望

事業の企画立案段階から話し合いを続けてきた NPO 法人とは、今後、当所スタッフがなくても実施できるよう準備を進めてきており、これからも連携を継続し、市街地における自然体験活動の重要性の普及啓発に努めたいと考えています。

当所は自然豊かな場所にありますが、多くの人に体験活動の機会と場の提供を行うために、今後も様々な機関や団体等と連携して、市街地での自然体験活動なども提供していきたいと考えています。

みんなで書き初めばしてみんね！ ～文字に込めた思いを伝えよう～

令和4年1月8日（土）

【担当：小野 栄策】



1) 事業の背景

国立青少年教育振興機構（以下、当機構）では、毎年1月6日に国立オリンピック記念青少年総合センター（以下、オリセン）を会場として、全国から高校生や大学生を募り「全国青少年書き初め大会」を開催しています。本大会は、第11回の開催を終え、大会の知名度も上がり、参加者数もある一定の段階まで確保することができています。

一方で、本大会がオリセンの所在する東京での開催である点や、対象が高校生及び大学生に限定されている点などから、全国の青少年に幅広く体験の機会を提供できているとは言い難い状況です。

この背景を踏まえ、当機構では青少年に対して様々な体験活動の場や機会を提供し、広く普及するという基本理念に則り、日本の伝統文化の一つである「書」活動についても、青少年の文化体験活動の裾野をより広げることを目的に「全国一斉書き初め大会」を新設し、全施設において書き初めに関連するイベントを毎年開催することとしました。具体的には青少年やその家族を対象に、書き初めや日本の伝統文化に触れる機会を設けます。令和4年度からの全施設本格実施に先駆け、令和3年度は試行事業として実施するものです。

2) 事業の趣旨

日本の伝統文化の一つである「書」活動について、青少年の文化体験活動の裾野をより広げることを目的に、書き初めに関連するイベントを開催し、青少年やその家族を対象に書き初めや日本の伝統文化に触れる機会を設ける。

3) 目標

- ① 積極的に友達と関わり、協力して活動することができる。
- ② 筆ペンアート、書道に興味を持ち、好きな文字を丁寧に書くことができる。
- ③ 自分の作品に対する思いをみんなに伝えることができる。

4) 対象

小学3年生～中学3年生 30名程度

5) 事業の実施

① 参加者

17名（男子6名、女子11名）

	小学3年	小学4年	小学5年	小学6年	中学1年	合計
男子	4	1	1	0	0	6
女子	1	2	6	1	1	11
合計	5	3	7	1	1	17

② 日程

時間	内容
9:30	受付
9:45	始まりの会 仲良くなるゲーム
10:30	カラフル筆ペンアート
12:00	昼食（お正月料理を食べよう）【レストラン】
13:00	ミニ講演（言葉に込めた思い）
13:30	書き初め体験
15:00	作品発表会
15:30	書道部パフォーマンス
16:00	終わりの会 解散

③ 活動の様子



【仲良くなるゲーム】

受付、始まりの会が終わり、緊張感が漂う雰囲気を和ませるために、仲良くなるゲームを行いました。顔も名前も知らない子供たちが、気軽に話せるように、じゃんけんゲーム・自己紹介ビンゴゲームを行いました。初めて会った子と仲良くなり、昼休みも一緒に遊び、友達づくりのきっかけとなりました。



【カラフル筆ペンアート】

子供たちは、好きな字を一字決めて、はがきサイズの紙に、筆ペンでカラフルに字を描きました。講師から「普段書いている字の概念にとらわれず自由に書こう」とアドバイスをいただき、文字の色や形、大きさや書く方向などを工夫し、イメージをさらにふくらませて作品を完成させました。講師が机間指導の中で、迷っている子への具体的なアドバイスや作品を褒めることで、子供たちのやる気につながっていました。



習字とは違って自由に表現できたこと、自分の考えたアイデアがきれいに表現できたこと、色づかいや書く場所によって作品の印象が違うことに気付けたことなど、作品作りを楽しんでいました。

最後はお気に入りのカードを一枚選び、はがき掛けに貼って、家で飾れるようにしました。



【お正月料理】

昼食は、レストランのご厚意によりお雑煮とお節料理を準備していただきました。お節料理には子孫繁栄や長寿、出世、運氣上昇などの願いを込められていることを紹介し、みんなで食べました。きれいな盛り付けに感動したようで、日頃食べられないような食材も出て、見た目も楽しみながら会食を楽しみました。



【書き初め】

まず、講師が、書道を志したきっかけや書道のすばらしさなどを紹介しました。

次に、講師が、準備したお手本をもとに西海学園高等学校書道部の生徒たちの支援を受け、書き初めを行いました。親しみやすいお兄さん・お姉さんが、マンツーマンで分かりやすく教えてくれたことで、子供たちは集中して、お手本に近づくような美しい文字を書くことができました。

最後に、書道部の生徒が司会を務め、「なぜ書き初めにこの字を選んだか」を一人一人発表しました。参観した保護者も「こんなに上手にかけるとは思いませんでした」と技術の上達ぶりに驚いていました。

【書道パフォーマンス】

事業の締めくくりとして、西海学園高等学校書道部の生徒たちが、書道パフォーマンスを披露しました。個々の書道技術を寄せ合い、大きな紙に色とりどりの墨汁で書かれる字は、とてもダイナミックで参観者を魅了しました。

この活動は、自然の家Instagram登録者にライブ配信しました。はじめての取組でしたが、複数の視聴が確認できました。

6) 評価

① アンケート結果（キャンプ全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

② 参加者の声

- ・自分の考えがうまく表現できた作品があつて、先生に褒められました。
- ・カラフルに字を書けて楽しかったです。いろいろな形にするところが思った以上に、楽しかったです。
- ・想像力をのばす機会でもあり、優しくアドバイスやポイントを教えてもらえました。いろいろなアイデアを思いついて、とても楽しかったです。
- ・最初書いた時よりきれいになったのでうれしかったです。みなさんのおかげでちょっと習字が好きになりました。
- ・書道の先生や学生さんたちも来てくれて楽しくなりました。書道パフォーマンスを生で見られて、迫力がありました。学校でも頑張りたいです。
- ・書道の指導、発表会の司会、書道パフォーマンス、すべてが頼もしかったです。

7) 成果と課題

① 成果

ア. カラフル筆ペンアート

- ・カラフル筆ペンアートを取り入れたことで、字を書くことが苦手な子供も意欲的に取り組むことができました。
- ・講師が、一人一人優しく具体的なアドバイスをを行い、作品の良いところをたくさん褒めていただいたおかげで、子供たちのやる気が高まり、意欲的に活動に臨むことができました。
- ・少し活動時間が長いように感じましたが、全員集中して作品作りに没頭することができました。

イ. 書き初め

- ・書き初めの指導で、西海学園高等学校書道部の生徒たちの協力を得られたことは、参加した子供たちの技術向上だけではなく、高校生の支援する力を高められたので効果的でした。
- ・年齢も近く、親近感もあり、書道の知識や技能を持ち合わせた高校生が、指導することで、個別指導を充実することができました。

ウ. 作品発表会、書道パフォーマンス

- ・作品発表会や書道パフォーマンスの運営も高校生に任せることができました。
- ・作品発表会や書道パフォーマンスは、コロナウィルス感染症対策を十分に行いながら保護者にも参観を促しました。また、当日参加できない方々のためにインスタライブ配信という形でパフォーマンスを大勢の人に見ていただきました。子供だけでなく大人にも体験活動のよさを感じていただけました。

② 課題

- ・今回は「書」にこだわって活動内容を構成してみました。自然体験をメインに行う施設の強みを生かすうえでも、書に興味がない子供たちも参加しやすいプログラム内容を考えていく必要があります。
- ・お正月料理の評価がとても低かったのは、正月休み明けなのに、似たメニューであったことからあまり食が進まなかったことが考えられます。例えば七草がゆなど伝統文化の食を学ぶなど、食育の時間として工夫していくことも考えられます。
- ・チラシの配付、広報誌への掲載などにより募集を行ったが、十分な参加者を確保できませんでした。広報内容・広報の仕方などを考えていく必要があります。

③ 今後の展望

高校生との連携が効果的だったので、今後は、地元の高校にアプローチして今回同様の書道活動を仕組むことが考えられます。また、子供だけでなく大人にも伝統文化体験のよさを伝えることも有効だと思います。今後は、親子参加型でいきたいです。

子どもゆめ基金20周年記念事業
福富信也 “『個』をいかす
チームビルディング” セミナー



令和3年7月18日（日）

【担当：東島 憲之】

1) 事業の背景

国立青少年教育振興機構では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により自然体験や体験活動等の機会が減少していることを踏まえ、親子・幼児等に自然体験や読書活動などに親しむ機会や青少年が様々な体験活動を通して、自己成長や自己実現等を図ることができる場の提供等を目的として、子どもゆめ基金20周年記念事業を実施しています。

また、本所が立地する諫早市においては、第2次諫早市総合計画を策定し、こころ豊かなひとづくりの施策の1つとして、スポーツ拠点施設の整備、生涯スポーツの振興、スポーツ競技力の向上といったスポーツ・レクリエーションの振興に取り組まれています。

当所では、人づくり・仲間づくり・チームづくりのための活動プログラムや事業を提供し、チームビルディングに関して力を入れています。そこで、スポーツ指導に関わる方を対象に日本のチームビルディングにおいて第一人者として活躍される福富信也氏を講師に子どもゆめ基金創設20周年記念事業の一環として本セミナーを諫早市内で開催することとしました。

2) 事業の趣旨

スポーツ指導に関わる方を対象とし、日本のチームビルディングにおいて第一人者として活躍される福富信也氏を講師に、個を引き出しチームの組織力を高めるための方法や考え方を学ぶ。

3) 目標

- ① チームビルディングについての方法や考え方について学ぶ。
- ② 子供たちの可能性を引き出す指導の在り方や関わり方を学ぶ。

4) 対象

スポーツ指導に関わっている方、プレイヤー、保護者、興味関心のある方など 50名

5) 事業の実施

① 期日

令和3年7月18日（日） 19:00～20:30

② 講師

福富 信也 氏（東京電機大学理工学部専任講師／(株)ヒューマナジー代表取締役）
＜講師プロフィール＞

信州大学大学院教育学研究科修了、Jリーグ横浜 F・マリノスコーチを経て、2011年東京電機大学理工学部に着任。Jリーグ監督に必要なS級ライセンスで講師を務める。最近では、2016-17年北海道コンサドーレ札幌（J2優勝、J1昇格）、

2018-19年ヴィッセル神戸（天皇杯優勝）をサポート。2020年からはラグビートップリーグNTTドコモレッドハリケーンズでアドバイザーを務めている。その他、大企業から中小企業まで幅広い研修実績をもつ。

③ 会場

諫早文化会館 2階展示室 （諫早市宇都町9-2）

④ 参加者

28名

⑤ 日程

18:30	受付
19:00	開会 講演 <ul style="list-style-type: none"> ・脱トップダウン思考→心の安全 ・スポーツビジネス ・リーダーシップとフォロアーシップ ・チームの成長曲線 等
20:30	質疑応答 閉会

⑥ セミナーの様子



セミナーは、参加者間の学びの場となるように、2~3人グループでのゲームやディスカッションを含んだワークショップ形式としました。

参加者のほとんどが指導の現場に携わっており、今抱えている課題を具体的に講師に質問する様子や、他者の質問に対する講師の話に共感しながら聞いている様子が見られました。

6) 評価

① アンケート結果（事業全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
90%	10%	0%	0%

② 参加者の声

- ・やっていることの確認ができ反省点にも気付きました。また、明確になった点も多かったです。
- ・指導時の課題が解決できそうで楽しみです。他の指導者と参加したい内容でした。
- ・子供との関わり方、声かけについて改めて考えることができました。

7) 成果と課題

① 成果

これまでも主に学校関係者を対象にグループ作りに関する研修を実施していましたが、学校休業日の昼間に実施していたため、地域のスポーツ団体の指導者は日程や時間が合わず、参加できずにいました。今回は、開催日が夏休み前の日曜日となったため、参加対象の指導者が試合や練習後に参加できるように、市中心部の施設を会場とし、開始時刻を19時としました。その結果、多くの指導者が参加することができました。

また、事業後、参加者が指導する小中学生のサッカーチームが当所を利用し、沢登りやI-CAP等を実施しました。事業の1週間後であったため、指導者の意識も高く、施設利用アンケートでは、体験活動の効果を実感したとの回答がありました。

② 課題

開催場所を市中心部とすることや開始時間を日曜日の夜間とすることで多くのスポーツ指導者が参加することができましたが、そのために、体験と講義には時間が足らなかったという声もありました。全てのスポーツ指導者が集まることのできる日程を設定することの困難さを感じました。

③ 今後の展望

今回の事業を通してスポーツ団体等の指導者にチームビルディングへの関心の高さや研修のニーズがあることが分かりました。また、諫早市がスポーツ団体への支援を推進していることを踏まえ、多様な体験活動によるチームづくりの効果や当所で実施する指導者対象の事業について、スポーツ団体等の指導者にも情報が届くようV・ファーレン長崎や長崎ヴェルカなどのプロ活動の団体等と連携を進め、広報先の拡大を検討したいと思います。

佐賀・長崎 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業 子どもゆめ基金助成金募集説明会

佐賀会場 令和3年9月18日（土）

長崎会場 令和3年9月19日（日）

【担当：東島 憲之】



1) 事業の背景

「子どもゆめ基金」は、未来を担う夢を持った子供の健全育成を進めるため、地域の草の根団体が実施する自然に触れ親しむ活動や科学実験教室、異年齢間の交流を促進する活動、絵本の読み聞かせ会などの読書活動などへ支援を行っています。

佐賀・長崎「体験の風をおこそう運動」推進実行委員会（国立諫早青少年自然の家が事務局）では、本事業を、平成26年度から長崎県内で、平成30年度から長崎と佐賀で開催しています。

2) 事業の趣旨

本事業を開催し、広く「子どもゆめ基金」の存在を周知することで、子供の体験活動を推進する機運の向上を図る。

3) 目標

- ① 佐賀、長崎県内の関係機関と連携して、子供の体験活動を広げる。
- ② 助成金を活用してもらうことにより、一緒に子供の体験活動を広げる。

4) 対象

社団法人、財団法人、NPO法人、法人格を有しない地域のグループ・サークルなど、青少年教育に関する活動を行う民間の団体 各会場30名程度

5) 事業の実施

① 期日

ア. 佐賀会場 令和3年9月18日（土）

イ. 長崎会場 令和3年9月19日（日）

② 会場

ア. 佐賀会場 佐賀市市民活動プラザ
(佐賀県佐賀市白山2丁目1番12号 佐賀商工ビル7階)

イ. 長崎会場 ミライ on 図書館
(長崎県大村市東本町481)

③ 参加者

ア. 佐賀会場 3団体 4名

イ. 長崎会場 8団体 11名

④ 日程

13:00	開会 ① 助成金の概要説明、申請書の書き方 ② 質疑応答 ③ 個別相談（相談終了後、適宜解散）
16:30	閉会

⑤ 説明会の様子



例年、本事業の説明は、子どもゆめ基金部助成課職員が会場で実施していますが、今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によりオンラインでの説明となりました。

途中、ネットワークが不安定となり説明が聞き取りにくい状況もありましたが、会場にいる当所スタッフが補足説明し、オンラインの説明内容と配布資料のずれを修正しました。

質疑応答や個別相談も問題なく実施でき、初参加の方からも分かりやすかったとの感想がありました。

6) 評価

① アンケート結果（事業全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
55%	41%	4%	0%

② 参加者の声

- ・説明を聞き、ひとり親家庭を対象に様々な体験活動を企画したいと思います。
- ・親切に、そして、感染対策も十分にいただき安心して受講できました。
- ・初めての申請のため、理解が不十分です。資料をよく読んで申請を検討したいです。

7) 成果と課題

① 成果

初めて申請する団体も含めてすべての団体から、助成金の申請を検討したいとの回答があり、全体として本制度への理解の深まりを感じることができました。

② 課題

佐賀県と長崎県での開催を継続できていますが、各県1か所の会場では、遠方からの参加となることは回避できません。また、これまで台風接近や新型コロナウイルス感染症の流行により、開催を中止した場合もありました。より多くの団体の参加を可能とする形を考え、本制度を有効に活用してもらうような方策を考える必要があります。

③ 今後の展望

参加者が事業案内を受信した広報媒体は、助成課や本所からの郵送チラシ、県や所属団体からの案内、本所の SNS と幅広いことが分かりました。今後も継続して幅広い広報を実

施したいと思います。また、遠方からの参加者のニーズに応え、台風等の天候不良時にも対応できるようオンラインを活用した開催を検討したいと思います。

(2) 青少年を対象に体験活動を通じた自己成長や自己実現等を図る事業

子どもゆめ基金 20 周年記念事業
サバイバルキャンプ
～無人島で 72 時間を生き抜く～

令和 3 年 12 月 3 日 (金) ～5 日 (日)

【担当：園部 翔】



1) 事業の背景

独立行政法人国立青少年教育振興機構では、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により自然体験や体験活動等の機会が減少していることを踏まえ、必要な感染防止対策を行いながら安全安心な体験活動等の重要性を広く普及・啓発することが求められています。

また、国土強靱化計画における広域防災保管拠点としての役割を踏まえて施設内外で防災・減災教育の推進を図っています。

全国の防災力に関する調査結果（日本気象株式会社調査 2014 年）によると長崎県は 46 位であることが分かりました。また、近年の長崎県では、線状降水帯による大雨や台風、地震など災害を身近に感じるが増えていると感じます。

そこで、過酷な生活環境を通して、自己成長や自己実現等を図ることを目的に、無人島で周囲の人と協働して生き抜くための必要な知識やスキルを考える事業として企画しました。

企画・運営には、本所で活動を続けている法人ボランティアが、株式会社大村湾リゾートで勤めており、連携することで、無人島という環境の提供が可能となりました。

2) 事業の趣旨

電気・ガス・水道のない過酷な生活環境での無人島キャンプを通して、自らを律し自ら動く忍耐力と行動力、ライフラインに頼らない生活力を身に付け、自己成長を図る。また、周りの人々と力を合わせて生き抜く中で、集団を導くリーダーシップを育む。

3) 事業の目標

参加者が「楽しかった」だけでなく、「ためになった」と感じてもらえるようにする。

4) 共催 株式会社大村湾リゾート（以下、大村湾リゾートという）

5) 対象 高校生以上の学生 30 名

6) 事業の実施

① 期日 令和 3 年 12 月 3 日 (金) ～12 月 5 日 (日) 2 泊 3 日

② 参加者数 16 名

所属	男性	女性	計
大学生	9	5	14
高校生	0	2	2
合計	9	7	16

③ プログラム

12月3日(金)	12月4日(土)	12月5日(日)
【災害について知る日】 @国立諫早青少年自然の家 20:15 受付 20:30 結団式 21:00 事前演習 入浴、就寝	【個人のスキルを高め、生き抜く日】 @無人島「田島」 7:00 朝食・宿泊場所片付け 9:00 事前演習 11:00 昼食、バス・フェリー移動 フィールドワーク 水、食、火、寝床確保 夕食、入浴、就寝	【日常に感謝する日】 @無人島「田島」 朝食、片づけ 10:00 ふりかえり 11:30 フェリー移動 12:30 昼食、解散式 13:30 バス移動 15:30 解散

④ 活動の様子



【結団式】

結団式の始まりは緊張感が漂っていました。まず、なぜ無人島を会場にしたのかなど事業趣旨の説明を行いました。その後、緊張感をほぐすために、ともに活動するメンバーをお互いに知り合えるよう、自己紹介を中心とした活動を行いました。

参加者は活動を通して徐々に表情が和らいでいきました。



【事前演習】

無人島での活動時には、スタッフは安全指導のみを行うことを伝え、自分たちで活動ができるよう、無人島で必要なロープワークやバックパックについてなどの事前演習を行いました。

参加者は、楽しみながらも真剣なまなざしで活動に取り組んでいました。



【フィールドワーク(全体)】

無人島に到着後、必要な安全指導を行いました。

また、島内に「掲示板」を設置し、参加者はそこから活動中等の必要な情報を入手する方式を採用しました。

当日は、強風に見舞われましたが、参加者は全員が1日を安全に過ごせるよう、事前演習で学んだことを活かして生活していました。お互いに意見を出し合って「水・食材の配分」「火起こし」「寝床づくり」を行っていました。





【フィールドワーク（水・食材）】

無人島には飲用に適した水や食材を確保できないため、参加者は事前に当所で給水した 50 のポリ容器と配給された 3 日分の食材を持って入島しました。

参加者は、自分たちでそれぞれの配分を考えて過ごしていました。



【フィールドワーク（火）】

薪やマッチ、ライター等は支給せず、参加者にはファイヤースタータを配布し、事前演習で使用方法のみを伝えました。

参加者は、薪の代わりに流木や落ち葉を集めていました。最初はなかなか火が付かず、苦戦していましたが、意見を出し合いながら、最後は全部の班が火をつけることができました。



【フィールドワーク（寝床）】

参加者には、シェルター、銀マット、寝袋を事前に配布しました。

コロナ感染症対策と独りで一晩を過ごすことで、自己について振り返る機会にすることをねらいとして、一人一つの寝床をつくって過ごしました。

事前演習で学んだロープワークを生かして、きれいに寝床を作っていましたが、孤独や寒さにより、熟睡できない参加者もいました。



【ふりかえり】

3 日間での体験を通して気づいたことを共有・整理し、「日常化」につなげられるようふりかえりを行いました。

参加者は、同じ活動でも気づきが違うことに驚いたり、同じ気づきに共感したりする姿が見られました。

7) 評価

① アンケート結果

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

② 参加者の声

- ・一人でできることは少ないと感じました。誰かが動けば助かることがあるので、その時に動ける人でいたいです。
- ・周囲の人と声を掛け合うことで、不安が軽減されるし、多くのことができるようになるので、実際の現場では、まずは声を掛け合うようにしたいです。
- ・体験を通して人を助けるための自分のレベルを把握することができたので、知識を高めていきたいです。

- ・食材や水を計画的に摂取する経験がなかったので、食材や水の貴重さを感じる機会になりました。

8) 成果と課題

① 成果

実際に電気・ガス・水道のない過酷な無人島を会場にできたことで、参加者が真剣に活動することができました。その結果、体験を通した具体的な気付きにつながりました。

本事業の企画・運営は、当所所属の大学生ボランティア2名と、共催団体の大村湾リゾート職員1名と行いました。大村湾リゾートの職員も当所所属のボランティアとして活動をしているため、3名は互いの経験値や特長を理解しあえており、スムーズに企画・運営をすることができました。また、週に1回のオンラインミーティングや月に1回の現地踏査を通して、企画の立て方や、スケジュール感覚を共有しながら企画を進めていくことの重要性に気付くなど、ボランティアにとって多様な学びの機会とすることができました。

本事業の取組にメディアから高い関心が寄せられました。長崎新聞社の取材により記事の掲載、株式会社長崎国際テレビによる企画時から事業実施期間の密着取材により報道番組で10分間の特集が放映されました。NBC長崎放送のラジオ番組にボランティア2名の10分間のインタビューが放送されました。当所の大学生ボランティアの活躍を広く知ってもらう機会となりました。

② 課題

会場を無人島で実施する際には、あらゆる状況下で参加者の学びを担保ができる事業の企画が重要です。事業当日は晴天でしたが、風が強く、無人島を運営する大村湾リゾートが定める渡航判断基準と照らし合わせて、当所を出発する直前まで渡航の判断をしかねる天候でした。そのため、現地に渡航できない際にプログラムを実施できる会場等の代案も重要と考えます。

③ 今後の展望

今回、高校生以上を対象に、防災に関する活動プログラムを実施しました。当所では、次年度以降も小学生を対象に防災・減災事業を実施する予定です。今回実施した事業の成果を生かして、今後も青少年が主体的に防災意識を高め、リーダーシップが育成される機会の充実を図りたいです。

(3) 環境教育や人権教育などのESDに対応した事業

佐賀・長崎 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業 木育キャンプ ～森林を学び、木から創り、木と遊ぶ～

日吉自然の家	令和3年10月16日(土)～17日(日)
西彼青年の家	令和3年11月6日(土)～7日(日)
黒髪少年自然の家	令和4年1月23日(日) ※本所職員不参加
北山少年自然の家	中止



【担当：小野 栄策】

1) 事業の背景

近年、異常ともいえる気象が常態化しつつあり、様々な災害を引き起こし、人々の生活に甚大な被害をもたらしています。異常気象と環境問題は切り離すことができません。環境保全に寄与する態度を育成する環境教育は喫緊の課題といえ、その中でも国土の3/4を占める森林の役割を理解すること(木育)はSDGsを推進する上でもとても重要です。

諫早青少年自然の家は「森と溪流の諫早」をキャッチフレーズとし、沢登りやウォークラリーなどをプログラム化し、それを多くの利用団体が活用しています。しかしながら、研修支援向けに「森」や「木材」について学ぶプログラムは開発されていません。本所周辺の森や木材を活用したプログラムを開発することは、本所の特色を一層高めることにつながります。

また、当所は集団宿泊活動での活動を教育課程に位置づけることができる教科横断的なプログラムの開発が求められています。「木育」は、既に様々な学校において、理科や社会、あるいは総合的な学習の時間での実践例が数多くあります。学校行事の精選、授業時数の確保が必須な学校現場の現状を鑑みて、宿泊体験活動に木育プログラムをミックスしていけば、学校団体のニーズに応えられると考えます。

さらに、青少年等の森林体験活動の機会の提供、指導者の育成、国民生活に必要な物資としての木の良さやその利用の意義を学ぶ活動である「木育」を推進し、プログラムを開発することは、国立青少年教育施設に求められる役割であり、事業の成果(プログラム、運営手法等)を公立施設や学校等に普及する必要があります。

昨年度まで、当事業は、公立青少年施設(日吉、西彼、黒髪)との共催で実施し、参加者募集、当所への引率、公立施設職員の事業運営参画等を行う中で、直接ノウハウ等を提供してきました。本年度は、これまでの学びを生かして、それぞれの公立施設のフィールドで木育キャンプを行い、当所職員が運営補助に当たることで、公立施設の教育力向上を図りました。

2) 事業の趣旨

次代を担う子供たちに対し、木についての様々な体験を通して理解を深め、自然に親しむ心情や社会性を育てるとともに、森林や環境問題に対する正しい理解の基礎を育み、持続可能な社会づくりの担い手育成の一助とする。

3) 目標

- ① 自然林や植林された森の観察をすることにより、自然や環境について興味を深める。
- ② 木材の加工現場を見学し、生活空間で木と人との密接な関りについて考え興味を深める。
- ③ 木材を使用したクラフト、樹木を利用した遊具体験を通じ、更に親しみをもってもらおう。
- ④ 偶然性を伴う異年齢集団活動の中で、コミュニケーション力を高め良好な関係を築く。

4) 対象

小学校4年生～中学校1年生 30名程度

5) 事業の実施

① 参加者

会場	男女別・学年別内訳
日吉自然の家	参加者 27名 (男子 17名、女子 10名) 小学校4年生 16名 (男子 10名、女子 6名) 小学校5年生 7名 (男子 4名、女子 3名) 小学校6年生 1名 (男子 0名、女子 1名) 中学校1年生 3名 (男子 3名、女子 0名)
西彼青年の家	参加者 17名 (男子 13名、女子 4名) 小学校4年生 5名 (男子 4名、女子 1名) 小学校5年生 7名 (男子 6名、女子 1名) 小学校6年生 3名 (男子 2名、女子 1名) 中学校1年生 2名 (男子 1名、女子 1名)
黒髪少年自然の家	参加者 72名 ※新型コロナウイルス感染症拡大に伴い本所職員は不参加
北山少年自然の家	新型コロナウイルス感染症拡大に伴い中止

② 日程

日吉自然の家

1日目	2日目
内容	内容
11:00 出会いの会	9:00 きこり体験 (まき割)
11:20 仲良くなろう	10:00 火おこし体験
13:30 市民の森 作業の見学	11:00 たき火で調理
15:00 木工館見学	簡単クッキング
16:30 入所オリエンテーション	12:30 森の散策
18:30 木製時計作り	13:45 アンケート記入
20:30 振り返り	14:00 終わりの会
21:00 入浴 就寝	

西彼青年の家

1日目	2日目
内容	内容
10:30 出会いの集い オリエンテーション	9:00 木工クラフト
10:50 アイスブレイク	11:00 回廊体験
11:20 「森林の学び」	13:00 アンケート記入 終わりの会
13:00 森林の学び① 植林地	
14:00 森林の学び② 森林と林業	
15:00 森林の学び③ 製材所	
16:00 森林の学び④ タイニーハウス	
17:30 講師へのお礼	

③ 活動の様子（西彼青年の家「木育キャンプ」）

【アイスブレイク】



【森林の学び】



【森林見学】



【アイスブレイク】

初めて出会った子供たち同士が、お互いを知り、緊張した雰囲気を和ませるために、班ごとに分かれて自己紹介を行ったり、じゃんけんゲームを行ったりしました。その後、活動班ごとに班長など役割分担を決めたことにより自主的・積極的な行動が目立つようになりました。この活動をきっかけに休憩時間にボール遊びをしたり、楽しく談笑したりする姿が見られるようになり、良好な関係を築く一助となりました

【森林の学び】

森林環境コーディネーターの方から、「木の特徴」「森林の育て方」「森の役割」「長崎県の林業の現状」について説明してもらいました。実際に木の香りを嗅ぐこと子供たちの興味が高まり、林業について多くの知識を得られたことは、子供たちにとって有意義なものとなりました。専門家から今回の森林見学の説明を聞いたことで、午後からの森林見学の視点を持つことができました。

【森林見学】

森林見学①

早生植林材センダンの森づくりの様子を見学しました。センダンは、成長が早く下刈りの作業が省け、ケヤキに似た材質なので、今後の利用が期待される木であること等が説明されました。

森林見学②

次に、ヒノキ林で行われている木の伐採の様子を見学しました。林業課技師の方から森の働きについて説明を聞き、林業組合の方から実際に木を切り倒す様子を見せてもらいました。子供たちが特に関心を持っていたのが、高性能林業機械による木の伐採の様子です。その後、行われたのこぎりによる丸太切り体験の苦労と比較して、その効率と仕事のスピードに驚いていました。

森林見学③

更に、製材所を訪ねました。切り倒された木が、製材機にかけられ、皮を剥がしたり、使用目的に応じて木材を切断したりする様子を見学しました。一瞬かつ正確にでき上がる機械のすごさに驚いていました。お土産にいただいたまな板は記念として大切に使われることでしょう。

森林見学④

最後に、地元西海市で伐採されたヒノキを使用したタイニーハウスを見学しました。地元住民の会議や憩いの場、留学生の宿泊場所等に提供されるこの小さな家は、すべて木材で建てられています。「ヒノキの良い匂いがする」「ボルダリングの壁がある」「不眠や疲れが解消されそう」と木の魅力を満喫していました。

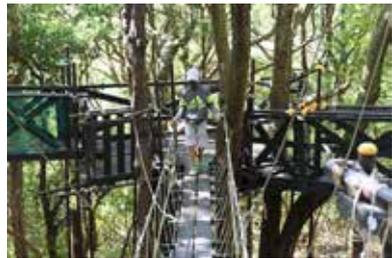
【木エクラフト】



【木エクラフト】

製材された木の活用例として、杉の板を焼き、磨き上げた後に、絵や文字を描く、部屋のプレート作りを行いました。自然物で製作する良さや楽しさを感じながら、2日間一緒に過ごした仲間とともに作った作品は、一生の記念となるでしょう。でき上がった作品や頂いたお土産を自慢げに保護者に紹介する姿が見られました。

【回廊体験】



【回廊体験】

西彼青年の家の体験活動として、長い年月をかけて作られてきた回廊で遊ばせてもらいました。木と木を横断する形で森全体に広がった回廊の規模にまず驚かされます。子供たちが歩いても壊れないようにしっかりと木で組み立てていました。遊び心満載の回廊作りも、一度体験させてみたいと思いました。

6) 評価

① アンケート結果（西彼青年の家「木育キャンプ」）

活動内容	とてもよかった	よかった	あまりよくない	よくない
森林の学び	70%	30%	0%	0%
セダンの森	82%	18%	0%	0%
ヒノキ林	76%	18%	6%	0%
製材所	88%	12%	0%	0%
タイニーハウス	88%	12%	0%	0%
焼き板	82%	18%	0%	0%
回廊体験	88%	12%	0%	0%

② 参加者の声

- ・森林の学び(スライド)で講師の人がわかりやすく教えてくれたことが良かったです。天然林と人工林のこと、木の成長の仕方、葉の形で木の種類を見分けられることなどが分かってうれしかったです。
- ・製材所を見学して、ヒノキとスギの違いや、木から木材になるまでの作業を見られて良かったです。
- ・タイニーハウス見学で、床にはあまり「木目」が無いところが使用されていること、ヒノキはとても良い働きをしていることがわかりました。
- ・僕は、林業の様子を見て「楽しそう」と思いました。林業のすばらしさをみんなにも広めて、木を大切にしようと思う人を増やしていき、美しい自然をいつまでも保ち、後世に伝えていきたいと思いました。

7) 成果と課題

① 成果

- ・当所がこれまで取り組んできた「木育キャンプ」の学びを生かし、佐賀県、長崎県の公立青少年教育施設のフィールドで実際に行えたことは大きな成果です。

- ・それぞれの事業内容の交流、職員間の情報交換を積極的に行えました。実物に触れて木の性質を確認すること、森林伐採の様子や製材作業の様子を直に見学すること、「森林の学び」における講師の活用など、それぞれの施設が行ったプログラム内容を、体験することができました。
- ・公立青少年教育施設を拠点に木育事業支援団体のネットワーク化を進めることができました。

② 課題

- ・「木育って何」、「どんなことを学べるのか」「環境問題を考える必要性」などが具体的に参加者に伝わるような広報をしていく必要があります。
- ・「木育キャンプ」の取組を他の公立青少年教育施設に拡げることができませんでした。引き続き公立施設や学校等に普及する必要があります。

③ 今後の展望

日吉自然の家が行った一連の活動プログラム（薪割り体験、火付け体験、火起こし体験、野外炊事）や西彼青年の家が行っている回廊体験は、学校団体からのニーズも高く、利用促進と木育の普及に大きく貢献しています。本所でもこれらの取組を参考に、子供たちが森林に興味をいだくきっかけとなる活動プログラムを積極的に考えていきたいと思えます。まずは、他の施設の良いものを模倣し、その後に本所の特質に合わせたオリジナルの体験プログラム（例えば、木登り体験、昆虫の森づくりなど）を開発していきたいです。

日吉自然の家のキャンプで訪れた、市民の森木工館の環境整備に感銘を受けました。様々な木の展示は五感で木を体感することができます。クラフトコーナーは材料や道具、木の作品が上手に配置してあり、創作意欲が高まるしかけを随所に見ることができました。こういった空間作りを参考に、本所にも森林を学ぶ体験スペースを設置したいと思えます。

西彼青年の家の企画・運営の手法がとても参考になりました。木育キャンプを運営するためには専門家のアドバイスが必要不可欠です。森林見学を計画するときに森林環境コーディネーターの役割がとても重要でした。分かりやすい説明、その分野に精通した人脈、「ひと・もの・こと」を見事に活用して、子供たちの思考がつながるようにプログラムを組み立てていました。外部連携先との関係をより強固にするためにも、施設の垣根を超えたプロジェクトチームを組織することが必要です。社会教育施設の集客力、企業や行政の財力・広報力、大学や行政の専門性などを生かして、企画・運営を行いたいと考えています。当面は、当所が関係をつないできた緑化推進協会や県央振興局、県央木材製材所、県民の森インタープリターとの連携を深めるとともに、新たな連携先の開拓にも着手する予定です。

最後に、現在の林業が抱える喫緊の課題「担い手不足」にも一石投じたいと考えています。木を木材として育てるためには長い年月がかかり、間伐や枝打ちには大変な労力がかかります。海外から輸入される低コストの木材に圧倒され、日本の木材の需要は低下しています。それと同時に、環境保全には関心を高めていかなければなりません。そのためには、子供から大人まで幅広い木育の普及が必要と考えています。現在、本所では、主に小学校高学年の子供たちを対象に事業を進めてきました。それと同時進行で、今後は、よりキャリアモデルを身近に感じられる、高校生・大学生・ボランティアなどに広めていければと考えています。